

調査報告

植民地期、旧朝鮮全羅南道濟州島（現・大韓民国濟州特別自治道）に建てられた13の神祠とその跡地について

諸葛 衍 金 泰順
渡邊奈津子 中島三千男

JAKAL Youn KIM Taesoon
WATANABE Natsuko NAKAJIMA Michio

目次

- はじめに
- 第1章 植民地期、旧朝鮮における「神社」・神祠の創建
- 第2章 植民地期における濟州島の状況
 - 第1節 歴史、行政区画、産業、人口
 - 第2節 抗日運動と「4・3事件」
- 第3章 濟州島における神祠の設立
- 第4章 濟州島に建てられた神祠の聞き取りと跡地の現況
- おわりに

はじめに

日本による植民地支配下、旧朝鮮地域には数多くの神社や神祠⁽¹⁾が建てられた。神祠とは簡便な神祇奉斎施設のことで、小規模の神社と考えると良い（以下、神祠と区別された意味の神社を指す場合は「神社」と表記し、神祠を含めた神祇奉斎施設全体を指す場合は、単に神社と表記する。また、神社の創建の許可は公式には「創立」、神祠の場合は「設立」と言葉が使われる。）。濟州島には「神社」は一つも建てられず、14の神祠⁽²⁾が建てられた。

我々、神奈川大学歴史民俗資料学研究科に関係する4人は、2014年2月3日から8日にかけて、調査団を組み（団長中島三千男、金泰順、渡邊奈津子、諸葛衍）、濟州国際大学沈揆昊教授の全面的な協力を得て、楸子島に建てられた1神祠を除く濟州本島内に建てられた13の神祠全てについて調査を行い、植民地期の神社参拝などの様子を聞き取るとともに、それぞれの神祠及びその跡地が日本の敗戦後、どのような運命をたどって今日に至っているのかを調査した。

調査日程は以下の如くである。

2月3日 成田発 濟州着 濟州市觀徳亭での春節祭前夜祭 視察

- 4日 同上春節祭 視察
- 5日 涯月、翰林、大静、安德、中文の各神祠跡地調査
- 6日 朝天、旧左（東金寧里、細花里）、城山の各神祠跡地調査
- 7日 表善、南元、西帰、済州の各神祠跡地調査
- 8日 高光敏先生宅訪問 済州発 成田着

海外神社の研究は、戦前の1930年代以降に始まり、今日まで相当な蓄積を持っている。特に、1990年代以降は、海外神社が集中的に建てられた東北アジアの国々、地域における個別研究が盛んになり、日本の植民地であった旧朝鮮における研究も、栗田栄二、青野正明、山口公一や青井哲人、菅浩二等によって深められてきた⁽³⁾。

他方、そうした植民地期に建てられた海外神社は、日本の敗戦とともにその機能を失うわけであるが、その機能を失った神社の建物やその他の構築物、さらには境内地がその後、どのような運命をたどって今日に至っているかについての本格的な研究（「跡地研究」）は、中島三千男が1993年に発表した「台湾の神社跡を訪ねて」⁽⁴⁾を嚆矢とする。中島はこの論文において、植民地期、台湾東部の旧花蓮港庁下に建てられた五つの神社、12の神祠（社・祠）、一つの遥拝所の跡地の調査を行い現況を報告している。

中島の個人による研究は、その後、2003年に文部科学省によって採択された神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の一共同研究グループ（「海外神社跡地の景観変容」班）によって発展させられる。この共同研究グループによって、旧樺太、旧満州国、旧南洋群島、旧朝鮮などの地域で、海外神社跡地に関する現地調査、資料調査が行われ、その成果はCOEプログラムの年報やニューズレターで公表されている。

さらに、5年間のCOEプログラムが終了した後、神奈川大学ではその事業を引き継ぐべく、2008年に神奈川大学日本常民文化研究所の下に、非文字資料研究センターを設置したが、海外神社研究はここでもその一つの共同研究班として現在まで活動を続けている。

このように、1990年初頭に始まった、中島による海外神社跡地の研究は、COEプログラム、非文字資料研究センターの共同研究によって発展させられたが、その一応のまとめが中島の『海外神社跡地の景観変容』⁽⁵⁾である。

また、こうした調査研究報告とともに海外神社のデータベースの構築が津田良樹、渡邊奈津子を中心に行われ、毎年更新を行っていることもあって、内外から多くのアクセスを受けている⁽⁶⁾。

以上が、海外神社跡地研究の全体的な研究史であるが、海外神社そのものの研究に比して、この跡地の研究は始まったばかりと言って良い状況である。本稿に関連する旧朝鮮における纏まった跡地研究も、先に述べたCOEプログラムに基づく調査研究、すなわち2005年8月4日から13日まで韓国全羅南道と順郡における現地調査を踏まえて書かれた津田良樹、中島三千男、金花子、川村武史「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討——全羅南道、和順郡を中心に——」と、2014年9月8日から16日まで、非文字資料研究センターの共同調査として行われた旧朝鮮北部の調査報告、中島三千男、前田孝和、津田良樹、坂井久能、菅浩二、稲宮康人「旧朝鮮北部（現・朝鮮民主主義人民共和国）の神社跡地を訪ねて」⁽⁷⁾があるだけである。

ただ、まだ纏まってはいないが、非文字資料研究センターの設立以降、旧朝鮮地域の調査が、稲宮康人、辻子実によってなされ、それぞれニューズレターや年報等で報告されている⁽⁸⁾。

さらに、この海外神社跡地の研究は近年、海外で新しい動きが起きている。一つは、台湾での動きである。台湾では、海外神社跡地を歴史的遺産として、また文化財として、建物を含めた現状について、歴史的経緯を含めて詳細な調査、研究が行われてきたが、近年、それをさらに進めて、観光施設として、さらには世界遺産の一部として登録する動きがあるし、旧樺太（現ロシア・サハリン州）においても同様な動きがある⁽⁹⁾。また、韓国でも諸葛衍が「解放後朝鮮神宮の解体とその跡地利用について——1945年韓国解放から1970年代まで——」（2013年度、神奈川大学歴史民俗資料学研究所修士論文）を発表し大きな注目を浴びている⁽¹⁰⁾。

以上の研究史を踏まえて、以下、今回の済州島調査について詳しい報告を行う。尚、簡単な報告は既に渡邊奈津子が「韓国済州島海外神社跡地調査報告」（ニューズレター『非文字資料研究』33号、2015年1月）で行っている。

第1章 植民地期、旧朝鮮における「神社」・神祠の創建

朝鮮半島における神社は、1678年頃に現在の韓国釜山にあった倭館の日本人によって、航海の安全のために「金刀比羅神社」が建てられたことが嚆矢となっている⁽¹¹⁾。近代に入り、李氏朝鮮末期から日本人の半島進出とともに日本人移民・居留民によって主要都市、港湾などに遥拝所が建てられたが、1910年の日韓併合により、朝鮮の植民地支配のために設置された朝鮮総督府は、1915年に「神社寺院規則」を發布し、こうした神社の把握を行い、規則に則って申請させ許可（公認）していった。神社の「創立」年とはこの許可年のことであり、実際の神社の創建、鎮座年とは必ずしも一致しない。表1は朝鮮における年代別・道別の創立（許可）「神社」数を表したものであるが、「1916年～20年」の間が35社と一番多い。これはこの5年間に「神社」が実際に創建・鎮座した数ではなく、先に述べたように、近代に入り、日本人の半島進出、とりわけ日清・日露戦争を契機に一気に増えるが、こうした日本人（居留民）によって建てられた神社が1915年に制定された「神社寺院規則」に則って一斉に申請を行い、許可・公認されたもの（計13社）が含まれている数である。

この表にみられるように、創立「神社」数は1921年以降1935年まで漸減していくが、1936年から増え始め、特に1941年以降は急増する。これは言うまでもなく、朝鮮における皇民化政策の進展によるものである。具体的には1935年以降、宇垣総督の下で展開された農村振興運動＝「心田開発」運動の中で神社を政策的に利用することが積極的に行われるようになり、1936年の一連の神社改正、すなわち①国幣社に関する府令が出され「一道一国幣社」の方針が打ち出されたこと、②道（府、邑）供進社という朝鮮独自の社格を制定して神饌幣帛料を道（府、邑）からも供進できるようにしたこと、③「神社寺院規則」から神社を特立させ「神社規則」という単独の府令を發布し、国家の宗祀としての神社の位置づけを明確にしたことなどを行い、さらに日中戦争が始まると、1938年9月の「一面一神社設置」（「面」とは日本内地の「村」に相当する行政機関で、長は面長である）や護国神社の設置が打ち出された。このように、日中戦争の開始やアジア・太平洋戦争への突入に伴い、朝鮮人兵士の動員の必要から、朝鮮人の日本人化＝皇国臣民化のために神社は最大限に利用される。

表1 朝鮮における年代別・道別「神社」の創立（許可）数

道名 年代	咸鏡北道	咸鏡南道	平安北道	平安南道	黄海道	江原道	京畿道	忠清北道	忠清南道	慶尚北道	慶尚南道	全羅北道	全羅南道	合計
1916～20	3	2	3	2	1	1	5	0	2	1	6	6	3	35
1921～25	1	0	0	0	1	1	0	1	1	1	0	2	0	8
1926～30	0	0	1	0	0	0	0	0	3	2	0	0	1	7
1931～35	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	2
1936～40	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	1	4	8
1941～45	2	1	4	0	1	2	2	2	2	1	0	1	2	20
不明	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2
合計	7	3	8	2	4	5	7	4	9	6	6	11	10	82

出典：前掲（注3）、津田他「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討」289頁より転載

こうして1945年8月15日の日本の敗戦までに、朝鮮半島には、官幣大社2社（朝鮮神宮と扶余神宮。扶余神宮は造営中であった）、国幣小社8社（京城神社、全州神社、光州神社、大邱神社、龍頭山神社、平壤神社、江原神社、咸興神社）、一般「神社」72社、計82社が建てられた。

次に朝鮮半島に建てられた、神祠の創建状況を見ていこう。「神社」と神祠の違いについては先に指摘したが（注1参照）、済州島に建てられた神社は全て神祠であった。表2は朝鮮における年代別、道別の神祠の設立（許可）数であるが、ここでも1936年以降にその数が急増している。その理由は表1の「神社」数の検討で述べたことと全く同じ理由であるが、神祠については特に「皇紀（紀元）2600年」（1940年）を記念して集中的に建てられた。特に、後で済州島においてもみることができるが、1938年9月の「一面一社」運動が、現実には「一面一神祠」という形で展開された結果である。

また、この神祠に関しては設立年代だけではなく、地域的にも大きな特徴がある。それは全羅南道が際立って多いということである。特に1936年から40年にかけて221社もの神祠が設立されている点である。この時期の全地域を合わせた神祠設立数は361社であるので、その約3分の2弱が全羅南道で建てられた神祠であった。全羅南道の府邑面数は当時240であるので、数字だけでみると一面一

表2 朝鮮における年代別・道別神祠の設立（許可）数

道名 年代	咸鏡北道	咸鏡南道	平安北道	平安南道	黄海道	江原道	京畿道	忠清北道	忠清南道	慶尚北道	慶尚南道	全羅北道	全羅南道	合計
1917～20	1	6	7	2	2	1	6	3	7	7	5	3	0	50
1921～25	2	1	6	0	2	7	10	6	5	10	5	5	9	68
1926～30	4	3	6	1	8	7	9	6	9	15	12	4	6	90
1931～35	4	7	9	8	9	7	13	1	3	14	11	6	9	101
1936～40	9	7	13	12	13	17	38	3	7	11	6	4	221	361
1941～45	8	3	33	7	127	8	66	10	2	15	4	4	10	297
合計	28	27	74	30	161	47	142	29	33	72	43	26	255	967

出典：前掲（注3）、津田他「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討」290頁より転載

祠は実現したことになる。⁽¹²⁾

以上、朝鮮半島においては「神社」は82社、神祠は967社、合せて1,049社もの多くの神社が建てられたのである。この数は他の日本の「勢力圏」に建てられた神社数としては旧「満州」の243社、旧台湾の184社をはるかに凌駕する数であった。

第2章 植民地期における濟州島の状況

第1節 歴史、行政区画、産業、人口

さて、以上の研究史を踏まえて、今回、我々が調査を行った濟州島について基礎的な事実を簡単に押さえておこう。

濟州島は、火山の噴火によってできた島で、濟州海峡を挟んで、朝鮮半島の西南端から約90kmの地点にあり、韓国最大の島である。日本との関係では対馬海峡を挟んで五島列島とは180kmの距離がある。面積は1845km²でほぼ香川県に匹敵し、沖縄本島の1.5倍の広さである。現在の人口は約55万人で、日本で言えば、八王子市、川口市、杉並区などに匹敵する。島の中心には、韓国で最も標高の高い1950mの漢拏山がある。濟州島は、楕円形の形をした島で長軸（東西軸）が約73km、幅（南北軸）が約41kmとなっている。

この濟州島には古代から中世にかけて耽羅国という独立の王国があった。このため、半島の檀君神話と異なる三姓神話という独自の建国神話を持っている。百濟（～660年）、統一新羅（676年～892年）、高麗（918～1392年）に内属し、15世紀初め李氏朝鮮の時代に完全に併合された。高麗時代の1105年に耽羅州として直轄領に組み込まれ、1214年から濟州と呼ばれるようになった。また高麗時代には約100年にわたって、元の支配を受けた（1259年～1356年）。その初期、1270年～73年にかけて濟州島を拠点に三別抄（軍団）が元に対して最後の抵抗を試みたが、元・高麗連合軍に鎮圧された（この翌年の1274年に元・高麗連合軍の最初の日本侵攻・文永の役が起こる）。また、元の支配を受けた時、濟州島に牧場が置かれ、以後、濟州は馬産地になっていった。

李氏朝鮮時代には朝鮮八道の内の一つ、全羅道（1896年からは全羅南道）に組み込まれたが、江華島とならんで流刑地の一つとして有名で、政争に負けた王族や両班たちが流刑にされている。

1910年の韓国併合条約により、大韓帝国（1897年朝鮮は国号を改称）は日本の植民地となる。朝鮮総督府の下での濟州島の行政区画の変遷を簡単に追っていくと、まず1914年に全国地方行政の組織の改編が行われ、濟州島の場合には、それまでの濟州郡と旌義郡、大静郡を統合して濟州郡として改編した。⁽¹³⁾ その時に、濟州島と朝鮮半島西南端の間にあり、それまで莞島郡に属していた楸子島が濟州島の1面として追加され13面体制となった。さらに、1915年には郡制が廃止、島制が施行されて、濟州郡が行政区画としての濟州島となった。1931年に濟州面が濟州邑に昇格、1邑12面体制に移行、1935年には大静面、楸子面、旧左面を除く9つの面が涯月面、翰林面、安徳面、中文面、西帰面、南元面、表善面、城山面、朝天面と面名が変更となり、これが日本植民地の終焉まで続いた。

尚、1945年の韓国の解放とともに翌年に実施された道制施行により濟州島は全羅南道から分離され濟州道として独立の行政区域となり、この下に北部の濟州邑他5面の地域をもって北濟州郡、南部の西帰面他6面の地域をもって南濟州郡の2郡が設置された。1955年には、濟州邑が濟州市に昇格

し、翌年 1956 年には翰林面が翰林邑に昇格する際、一部翰京面という新たな面が生まれた。1981 年には、西帰浦邑と中文面が統合して西帰浦市となる。さらに 2006 年には現在の済州特別自治道となり、また済州市と北済州郡が合併して済州市、西帰浦市と南済州郡が合併して西帰浦市となり、2 市の体制となり今日に至っている。

済州島の日本との関係は早くからみられるが、1876（明治 9）年の日朝修好条規以降、朝鮮時代の末期から日本人が済州島に入り、漁業に従事している。初期は季節ごとに朝鮮で漁労活動を行う「通漁民」という形態であったが、次第に朝鮮に移住して漁労活動を行う「移住漁民」の形態が増えていった。済州島においても済州面、西帰浦、城山浦、翰林、楸子等で移住者が増えていく。漁種としては夏季の鰯漁、秋季の烏賊漁が中心的なもので、日本人は、漁船と漁労技術、潜水器などの発達した技術によって漁業を活発に営んでいたが、さらに水産物を輸出するために各漁村に水産物の加工工場⁽¹⁴⁾を設置した。1939 年の済州島の港には、済州港、翰林港、西帰浦港、城山港、楸子港などがあり、日本人の居住地は、この港が開かれた地域に集中していた。（表 3 参照）⁽¹⁵⁾

1900 年以前の済州島の経済状況は、商業活動も活発ではなく、自給自足的な自然経済的色彩が強かった。こうした状況に変化を与えたのが海女の労働である。済州島では古くから裸潜漁業が発達し、17 世紀末までは男性が中心で、鮑などの海産物は朝鮮王朝への献上品として重要視されていた。しかし、18 世紀以降は女性が中心的な担い手となっていった。近代に入り、日本人の貿易商の登場とともに海産物の需要が増加した。海女が収穫した海産物は、現金化されて済州島の経済を支える礎石となり、海女労働の経済的価値が上昇した。これにより、済州島の海岸地帯の経済活動を活性化させるとともに、済州島内の一部の村落が沿岸に移動していく現象をもたらした。⁽¹⁶⁾

このように、済州島の主要産業は水産業であったが、この水産業に続いて農業も行われていた（半農半漁）。『済州島勢要覧』（1939 年）では、「本島の総面積は、187,000 町歩中、耕地面積は、田 90,998 町歩 7 反、水田 983 町、合計 91,981 町 7 反なり、そして農家 1 戸当平均田 2 町 1 反余り……」⁽¹⁷⁾と記録されている。水田は、全体の耕地面積の約 1% で、ほとんどが「田」（畑）の耕地である。つまり、済州島は火山の噴火により形成された土質のために、稲作よりも畑作が重要農業であった。それ以外には蜜柑栽培、蚕業、林業、牧畜業なども小規模で営まれていた。

朝鮮時代の済州島には重要な交通路が二つあり、それは、済州郡と大静郡（南西方向）、済州郡と旌義郡（南東方向）を連結する道路であった。日本人が済州島で行った公共事業は、1912 年から始まった海岸線一周道路の拡張工事であった。この工事は 1918 年まで行われ、総延長 181 km、幅 6 m の道路が完成した。道路工事の時、周辺地域の住民を強制的に動員し、また個人所有の土地を道路の建設ために強制的に寄付をさせた。この海岸一周道路は、1932 年に幅 10 m の道路に拡張され、この時期から済州通運、南部通運、東部自動車などの三つの運送会社がタクシー 2 台、バス 29 台で営業を開始した。現在の済州市と西帰浦市を連結する横断道路もこの時期に建設された。この海岸線一周道路の建設によって城山、西帰浦、翰林などの村落が済州島の重要地として変貌した。⁽¹⁸⁾済州島の道路拡張の工事は、済州島の各地で生産された物資を迅速に運ぶために建設された。

また、日本との往来については、1922 年 12 月に、朝鮮と日本の自由渡航制が実施され、それにより 1923 年 12 月には、済州島と大阪の間に直航便が開設された。その時期に済州島の多くの人々が日本への出稼ぎのために渡航している。また、済州島民の中には大阪の工業地帯に残留する人が増え、

表3 1939年度濟州島の戸数と人口構成

	朝鮮人	内地人		滿州国・中華民國	外国人
濟州邑	8,821 戸	188 戸		6 戸	1 戸
	36,899 人	679 人	1.8% (総人口比)	14 人	1 人
涯月面	5,524 戸	4 戸		無	無
	21,489 人	11 人	0.05%		
翰林面	7,979 戸	49 戸		1 戸	無
	30,048 人	144 人	0.4%	3 人	
大静面	3,240 戸	20 戸		無	無
	13,221 人	61 人	0.45%		
安德面	2,061 戸	4 戸		無	無
	8,205 人	9 人	0.1%		
中文面	2,608 戸	3 戸		無	無
	11,445 人	10 人	0.09%		
西帰面	3,195 戸	62 戸		4 戸	1 戸
	13,404 人	216 人	1.5%	19 人	1 人
南元面	2,505 戸	4 戸		1 戸	無
	10,497 人	16 人	0.01%	6 人	
表善面	1,689 戸	9 戸		1 戸	無
	6,720 人	26 人	0.4%	2 人	
城山面	2,663 戸	22 戸		1 戸	無
	11,508 人	64 人	0.6%	6 人	
旧左面	4,788 戸	9 戸		1 戸	無
	20,197 人	28 人	0.1%	3 人	
朝天面	3,312 戸	4 戸		無	無
	14,760 人	13 人	0.08%		
楸子面	681 戸	18 戸		無	無
	3,748 人	78 人	2%		
総	49,264 戸	389 戸		16 戸	2 戸
	202,241 人	1,355 人	0.7%	57 人	2 人

出典：『濟州島勢要覧』（1939年、アジア歴史資料センター）より作成。

1934年には50,045人にのぼった。⁽¹⁹⁾これは、当時の濟州島民の全体人口の25%を占める数であった。

最後に、濟州島の13の神祠のほとんどが建てられた、1939年段階の濟州島の1邑12面の人口構成をみておこう。表3は地域別に朝鮮人と日本人（内地人）、その他外国人の戸数と人口、及び日本人の割合を表にしたものである。

濟州島の総人口は約20万人（203,655人）内、日本人人口は約1,300人（1,355人）で約0.7%である。日本人が一番多く住んでいるのは濟州島の中心である濟州邑の675人で、総人口の1.8%、また総人口の中で日本人の割合が一番高いのは楸子面の2%（78人）である。因みに、濟州邑に次いで、日本人人口の多いのは西帰面の216人（1.5%）翰林面の144人（0.4%）、楸子面の78人（2%）、城山面の64人（0.6%）、大静面の61人（0.45%）、残りの7面は30人、0.1%以下である。

第2節 抗日運動と「4・3事件」

以上みたように濟州島は朝鮮本土とは独自の歴史的伝統を持っていたこと、また李氏朝鮮時代が長らく流刑地として位置づけられたため、濟州島民は朝鮮本土からは「島人」として差別的扱いを受けていたこと、さらに地域の共同体が強固に残っていたため、人々の結びつきが強かった。こうしたこともあって、本土、中央の権力に対する抵抗意識は強く、日本の植民地統治の時代には抗日運動もしばしば起こり、日本の敗戦後は韓国政府・アメリカの軍政に対する抵抗・対抗運動である4・3事件という重たい事件も起きた。後で詳しくみる13の神祠の聞き取り調査でも、これらのことが出てくるので、それらについて簡単に説明しておこう。

1) 主な抗日運動

植民地期の濟州島における抗日運動は、主なものとして三つあり「濟州の三大抗日運動」と呼ばれている⁽²⁰⁾。

①法井寺抗日運動

1918年、植民地期の濟州島における最大の宗教系の抗日運動である法井寺抗日運動が起きた。先にみたように、地域共同体の強固な残存もあって濟州島では民間信仰としての巫俗信仰の傾向が強かったが、他方で新宗教の仙道教も大きな力を持っていた。1922年の濟州島の仙道教信者数は20,000人に達しているという新聞記事もある。朝鮮総督府は1915年に「布教規則」を出して統制を強めた。また、朝鮮仏教も1911年の「寺刹令」により総督府の監督が強化された。

このような流れの中で法井寺抗日運動が起きる。1918年10月6日から7日まで、現在の西帰浦市中文にあった法井寺で起こった。法井寺の僧侶金蓮日は、仙道教の首領朴明洙と連携して、法井寺の信者と仙道教の信者と合わせて400人を2隊に分けて、濟州島支庁西帰浦支所を攻撃した。僧侶金蓮日の蜂起隊は、中文駐在所を襲撃して破壊し、留置場に入れられた13人を釈放した。さらに、駐在所長及び日本人警察官3人を捕まえた。事態が深刻な状況であると判断した総督府は、木浦の鎮圧警察を濟州島に派遣して鎮圧し、蜂起軍の主導者12人と参加者66人を逮捕した⁽²¹⁾。逮捕された66人の内13人が僧侶であり、53人は仙道教徒であった。検挙された者の中で2人は獄中で死亡し、最高量刑も10年の判決が下った⁽²²⁾。

②濟州3・1独立万歳運動

法井寺抗日運動の翌年、1919年3月1日には、朝鮮半島の独立を求めてソウルで独立万歳運動が始まった。直ちに平壤などの大都市を中心に広がり、後に全国各地まで拡大した。この3・1独立万歳運動は植民地期における最大の抗日運動であった。

濟州島における3・1独立万歳運動は、当時、ソウル徽文高等普通學校の4年生である濟州島の朝天面出身の金章煥が3月16日故郷に帰ってきて、伯父金時範と金時殷の家を訪ね、ソウルの3・1運動の状況を説明しながら独立宣言書を見せたことが出発点となった。金時範と金時殷は、すでに3・1独立運動が全国的に拡大していることを察知、濟州地域で独立万歳運動の組織を結成することを決意した。2人の努力により14人の同志が集まったが、その14人は皆、濟州島の儒林（儒者の仲間）であった。

独立万歳の示威は、3月21日に朝面邑の朝天里、咸德里、新興里、新村里などの住民が500人は

ど集まって始まった。午後3時ごろ、金時範が独立宣言書を朗読後、濟州島の他の地域に拡散させるために独立万歳を叫びながら濟州邑の城内に向けて行進した。1次示威行進の結果、負傷者3人が発生し、13人が日本の警察により連行された。

3月22日と23日に再び朝天市場に200人が集まって、連行された人々の釈放を要求しながら独立万歳の示威が続けられた。3月24日には朝天(23)の市が立ったために1,500人ほどの大勢の人々が朝天市場で独立万歳の示威を行ったが、日本の警察によって主導者全員が検挙され、濟州島の4日間の独立万歳運動は沈静化させられた。

濟州島の3・1独立万歳運動は、濟州島の儒林たちによって主導され、以後の濟州島地域の民族教育運動と学生運動を活性化させる契機となった。

③濟州島海女抗日運動

1930年代に入ると、濟州島の海女による1930年代最大の抗日運動、女性集団によるものとしては最大規模の漁民闘争が起きた。海女の抗日運動は1930年から翌年にかけて展開されたが、そのきっかけは、海女漁業組合の御用化と海産物の買収価格の不正に対する抗議である。

濟州島の海女の歴史については先にみたように、18世紀以降、女性によって担われるようになったが、海女の出稼ぎは1890年代に朝鮮半島南部地域から始まり、日本植民地期には朝鮮半島の南部地域に限らず、北部地域や日本、中国の大連、青島、さらには樺太まで広がった。

1910年代の出稼ぎ海女の数には2,500人ほどだったが、1930年代になると約4,000人にまで増加している。例えば、1929年の出稼ぎ海女の人数は3,500人であり、その漁獲量50万元に比べ、濟州島内の海女(23)の人数は7,300人ほどあったが漁獲量は25万元で、濟州島の現地より収入が倍以上高かったので出稼ぎ海女が増え続けていった。

海女達の労働期は毎年4月から9月までで、海女が多い地域は、旧左面と城山面であり、濟州島の海女の収入の半分ほどがこの地域の海女によって稼がれた。

しかし、濟州島の海女の進出とともに、海女と他の地域の漁民との紛争が朝鮮半島の各地で起こり、1913年からは各地域の漁業組合に入漁料を払いながら採集することになったため、海女の収入が減少する原因となった。

さらに、海女が採取した海産物を客主に売買したが、採取した量と価格を騙される例が多かった。客主は、毎年1~2月に濟州島で海女を募集し、応募者に出魚準備金として海女に高利の前金を提供した。問題は、海女達が採取した海産物の支払い時期が漁期が終わる時点であったため、再び客主に金を借りる悪循環が続けられた。

このような悲惨な出稼ぎ海女の生活を察知した濟州島の有志たちが、出稼ぎ海女の保護のために、1920年に「濟州島海女漁業組合」を創立した。この海女組合は、これまでの海女たちに対する悪弊を一掃するとともに權益を保護し、海女たちが採取した海産物の共同販売や仲買の役割も果たした。海女組合は、釜山や木浦、麗水まで臨時出張所を設置し、様々な海女の權益保護をしながら伸張していった。

しかしながら、この「濟州島海女漁業組合」は、1920年代の後半から濟州島司が海女組合長を兼任することにより御用化されていった。海女組合の運営者たちが特定の商人と結託し、指定商人に売買するよう海女たちに強要した。こうして海女たちが採取した物は、市価の半値で売買されるように

なり、海女たちの不満が高まっていった。

濟州島の海女抗日運動の発端は、1930年11月に城山浦で海女たちが採取した海草の不正販売である。不正販売に抗議するために行った玄載成ら4人の海女たちを日本人警察が逮捕し、29日間の拘留を科した。これに対して、この地域の海女たちと青年たちがこの事件を糾弾する檄文を作成し、城山面と旧左面に配布した。警察は檄文を作成、配布した旧左面下島里の青年2人を検挙し、罰金処分にした。1931年1月には、下島里の海女たちが採取した海苔とアワビの価格を海女組合が安い価格で買い取ろうとしたことに対して、下島里の海女たちを中心とした抗争が始まった。海女たちは、まず、細花里、終達里、延坪里の海女たちに真相を知らせ、海女の生活や利益のために団結して闘うことを訴え、また集会を開いた。

1932年1月に下島里の海女たち300人は、細花里の市を利用して本格的に示威を展開した。これには、周辺の町の海女たちも参加し、面長や島司（濟州島司）とも交渉した。海女たちの要求は「海女組合費免除」の他に、日本人「島司の組合長兼職反対」、「日本人商人排斥」など抗日的な要求が含まれていた。

濟州島司は、海女たちの条件を受諾し、5日以内に解決すると約束した。しかし、島司が帰ってから日本の武装警察は1月23日から27日までに34人の海女たちと数十人の青年たちを逮捕した。

1930年から1932年1月まで持続された濟州島の海女の抗争は、延べ17,000人が参加し、大小集会を230回開くなど大規模な抗日運動でもあった。⁽²⁴⁾

2) 「4・3事件」

次に、日本の敗戦、朝鮮・韓国の「独立」後に起きた濟州島「4・3事件」⁽²⁵⁾についても簡単にみておこう。この事件は「1947年3月1日を起点とし、1948年4月3日に発生した騒擾事態及び1954年9月21日まで濟州道で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件」⁽²⁶⁾といわれるもので、1948年から朝鮮戦争を挟んで7年の間に多くの犠牲者を出した、悲惨な虐殺事件である。

この事件の発端は、1947年3月1日に濟州邑内で行われた3・1独立運動の記念式である。この記念式場に集っていた民衆と警察が衝突、6人が死亡、6人の重傷者が出た事件が導火線となった。当時、朝鮮半島の南半分は米軍政下にあったが、米軍政は、3・1独立運動の記念式を濟州西飛行場で行うことを許可したが、濟州島の左翼が主導して行事場所を濟州北小学校に変更し、行事が終わると市街を行進することになった。この民衆の中には、左翼の南朝鮮労働党（南労党）と民主主義民族戦線、民主主義青年同盟、婦女同盟、人民委員会などが動員した17,000人の群衆と他の一般群衆を合わせて計3万人ほどの群衆が集められた。警察側は、濟州島の警察330人と陸地から派遣された警察官100人など430人が周辺警備活動を行った。

行事が終わって街頭示威が始まった時、記念式場で騎馬警官が乗っていた馬に子供が蹴られる事件が起こった。警察官は、それを気づかずにその場を去って行ったが、この光景を見ていた群衆が騎馬警官に石を投げながら警察署まで追いかけていった。そのことを警察署の襲撃であると誤認した警察官が民衆に対して発砲し、6人が死亡、6人の重傷者を出したのである。これが「4・3事件」の端緒である。⁽²⁷⁾

このことに抗議して同年3月10日から官民の総ストライキが起こった。ストライキには、濟州島

の警察及び司法機関を除いた行政機関の23機関、105学校、その他郵便局、銀行、電気会社など160団体、4万人ほどが参加し、さらに一部の警察官もその20%が参加した。

警察は、同年の3月15日からストライキに参加した関連者の検挙を始め、4月10日までに500人余が検挙された。この検挙の中で66人の警察官が罷免され、欠員の警察官を反共右翼団体である西北青年会⁽²⁸⁾所属の団員が充員された。以降、警察官として充員された西北青年団の横暴に対する済州道民の反感と1948年5月10日に行われる予定の単独選挙⁽²⁹⁾に反対する南労党（南朝鮮労働党）系列の左翼たちの運動が複雑に絡んで、1948年4月3日の事件へと発展していく。

1948年1月22日、米軍政当局は南労党の朝天面支部を襲撃し106名の党員を逮捕した。2月には全国的に、アメリカの意を受けた朝鮮問題の国連の介入に反対する「2・7ゼネスト」があり、済州島でも9日から12日の3日間にわたってデモや警察署の襲撃が起こった。これに対して、軍政当局は、南労党本部の襲撃を含む左派勢力の一斉検挙で応えた。

こうした両派の緊張の高まりの中で、1948年4月3日、左翼側の「武装蜂起」が起きた。島内に24あった警察支署の内、13の支署が、また右翼団体の宿所や要人宅も襲撃された。死亡者は武装隊3人を含む15人であった。しかし、この小規模な4月3日の「武装蜂起」とその鎮圧は、のちの大虐殺へと直接的に繋がるものではなかった。

5月10日、単独選挙は済州島では3カ所の選挙区の内、2カ所で無効となったが、8月に大韓民国（初代大統領李承晩）が成立する。行政権が米軍政から韓国政府に移されたものの、左翼の武装隊を討伐する（討伐隊）主力をなしていた韓国国軍の指揮権は引き続き駐韓米軍司令官が握っていた。

そして、この年の10月から翌年の3月にかけて約9,000人の島民が殺されるという大規模な流血事件へと発展する。当時、討伐隊（鎮圧軍）が把握した左翼の武装隊の数は最大500人であったが、米軍の支援を受けた国軍、警察それに西北青年団などによる武装隊鎮圧過程において、30万余りの済州島民も巻き込まれ、最終的には2万5千～3万人の人々が虐殺されたとされている⁽³⁰⁾。中でも、西北青年団による一般住民への「左翼への内通」を口実にした虐殺は凄惨を極めた。⁽³¹⁾

この虐殺事件は米ソの冷戦、朝鮮半島の南北の対立を背景に、「共産匪（ゲリラ）による暴動」として長らく歴史の闇に葬られていたが、韓国の軍事政権の崩壊、民主化の進展とともに、1980年代末からようやく真相解明の動きが表れ、2000年1月、金大中大統領によって「済州四・三事件真相究明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」（「四・三特別法」、2000年1月12日制定、法律第6117号）が成立し、これにより「済州四・三事件真相究明及び犠牲者名誉回復委員会」（「四・三委員会」）が設置された。この委員会の調査によって2014年までに1万4,231名が犠牲者として公式に認定されている。この内、討伐隊（鎮圧軍）による犠牲者は10,955人（78%）、左翼武装隊による犠牲者が1,764人（12%）で、残りはその他・不明である。鎮圧作戦中に死亡した軍人が180人ほど、死亡した警察官が140人である。全体の犠牲者の中で女性が21.1%、10歳以下の子供が5.6%、61歳以上の老人が6.2%と、全体の32.9%が老人や婦女子である⁽³²⁾。

「4・3事件」は、1950年6月25日に起きた朝鮮戦争期まで続けられたが、1954年9月21日に出された「漢拏山の禁足地域」の全面開放とともに事件勃発後7年7カ月で幕を閉じた。

この済州「4・3事件」は、在日韓国人の人口割合にも大きな影響を及ぼした。当時、軍政警察及び西北青年団などの反共右翼団体の苛酷な弾圧から逃れるために対馬海峡を渡って日本の大阪一帯に

表4 濟州島の神祠一覧（設立許可年代順）

	神祠名	旧鎮座地	祭神	現在地	設立許可年月日	出願者
1	神明神祠	濟州邑	A	濟州市健入洞 1123	1931年 12月 1日	鈴木兵作外 93名
2	神明神祠	旧左面東金寧里	A、M	濟州市旧左邑金寧路 118-20	1939年 2月 25日	全仁洪外 16名
3	神明神祠	旧左面細花里	A、M	濟州市旧左邑細花里	1939年 2月 25日	全仁洪外 10名
4	神明神祠	大静面上摹里	A、M	西帰浦市大静邑上摹里	1939年 2月 25日	築山懋外 37名
5	神明神祠	城山面城山里	A、M	西帰浦市城山邑城山里	1939年 2月 25日	金鶴寶外 19名
6	神明神祠	朝天面朝天里	A、M	濟州市朝天邑朝天里新北路 236-2	1939年 2月 25日	金汝熙外 18名
7	神明神祠	安德面和順里	A、M	西帰浦市安德面和順里 1150	1939年 2月 25日	呉龍國外 13名
8	神明神祠	南元面南元里	A、M	西帰浦市南元邑南元里 171-1	1939年 2月 25日	金日華外 21名
9	神明神祠	中文面中文里	A、M	西帰浦市中文洞 1498	1939年 2月 25日	李斗白外 29名
10	神明神祠	涯月面涯月里	A、M	濟州市涯月邑涯月里 441-3	1939年 2月 25日	金益俊外 22名
11	神明神祠	翰林面翰林里	A、M	濟州市翰林邑翰林里 1284	1939年 3月 4日	金昶宇外 13名
12	神明神祠	西帰面西帰里	A、M	濟州市西帰浦市西帰洞 538	1939年 3月 22日	金贊益外 24名
13	神明神祠	表善面表善里	A、M	西帰浦市表善面表善里 317-1	1939年 3月 23日	宗仁錫外 10名
14	神祠	楸子面			1941年 5月 16日	吉村昇外 24名

注1 『神道史大辞典』（藺田稔・橋本政宣編、2004年、吉川弘文館）巻末付表、佐藤弘毅「終戦前の海外神社一覧」及び岩下傳次郎『大陸神社大観』（1941年、嵯峨井建復刻監修、2005年、ゆまに書房）を基に作成。

但し、『神道史大辞典』は旧左面の神明神祠は一つしか載せていない。また、祭神、鎮座地の「里」レベルまでの記載は『大陸神社大観』による。ただ、同書は昭和15（1940）年11月現在の神社・神祠を収録したものであるため、翌年に設立許可された楸子面の神祠は記載されていない。したがって、祭神名、「里」レベルまでの旧鎮座地は空白のままである。

また、同書では「設立許可年月日」を「設立年月日」と表記しているが、旧左面の二つの神祠の内、細花里の神明神祠の設立年月日を昭和14（1939）年2月24日、東金寧里のそれを1日遅い、25日としている。しかし、『朝鮮総督府官報』（第3633号、昭和14年3月2日）では両社とも「二月二十五日附之ヲ許可セリ」となっているため、それをとった。

これに関連して、表4の1～14までの神祠の順番は設立許可年月日順に並べたものであり、またそれが同じ場合は官報の記載順に並べたものである。但し、『朝鮮総督府官報』の記載は「面」レベルまでしか記載していないので、旧左面の神明神祠のどれが東金寧里のものでどれが細花里のものか分からない。1939年2月25日設立許可の濟州島の九つの神明神祠の内、旧左面のそれは1番目と8番目に記載されている。それで、便宜上、金寧里のものに2、細花里のものに3という番号を打った。

また『同書』では、4の大静面の神明神祠の鎮座地を下摹里としているが、今回の調査で上摹里であることが判明したのでそれを取った（本文21ページ参照）。

注2 「祭神」欄のAは天照大神、Mは明治天皇の略記である。

注3 出願者は『朝鮮総督府官報』に掲げる。鎮座地別に許可が掲載されている官報の刊行年月日、号数を表示すれば、濟州邑（1931年12月7日、第1476号）、旧左面2社を含む南元面までの1939年2月25日に許可された9社（1939年3月2日、第3633号）、西帰面（1939年3月25日、第3652号）、表善面（1939年3月27日、第3653号）、翰林面（1939年3月10日、第3640号）、楸子面（1941年5月22日、第4296号）となる。

避難してきた濟州人は少なくなかった。⁽³³⁾ 在日韓国人の中には、濟州島の出身者が少なくないといわれている。

第3章 濟州島における神祠の設立

表4は濟州島神祠一覧である。植民地期には全羅南道に属していた濟州島には14の神祠が建てられたが、この時期、濟州島は1邑12面体制であったので、全ての邑・面に神祠が建てられていることがわかる。また、その中でも旧左面だけは二つの神祠が建てられている。

濟州島で最初に建てられたのは、1931年12月1日（許可日）に天照大神を祭神として濟州邑に建立された濟州邑神明神祠（以下、神祠名は公式には「神明神祠」と「神祠」の二つだけであるが、本稿ではその地の邑・面名をつけて表示する。但し1面に2社ある旧左面の神祠については里名をつけて表示する）である。残りの13の神祠の内、11神祠が1939年に、しかもその内の9神祠が同じ

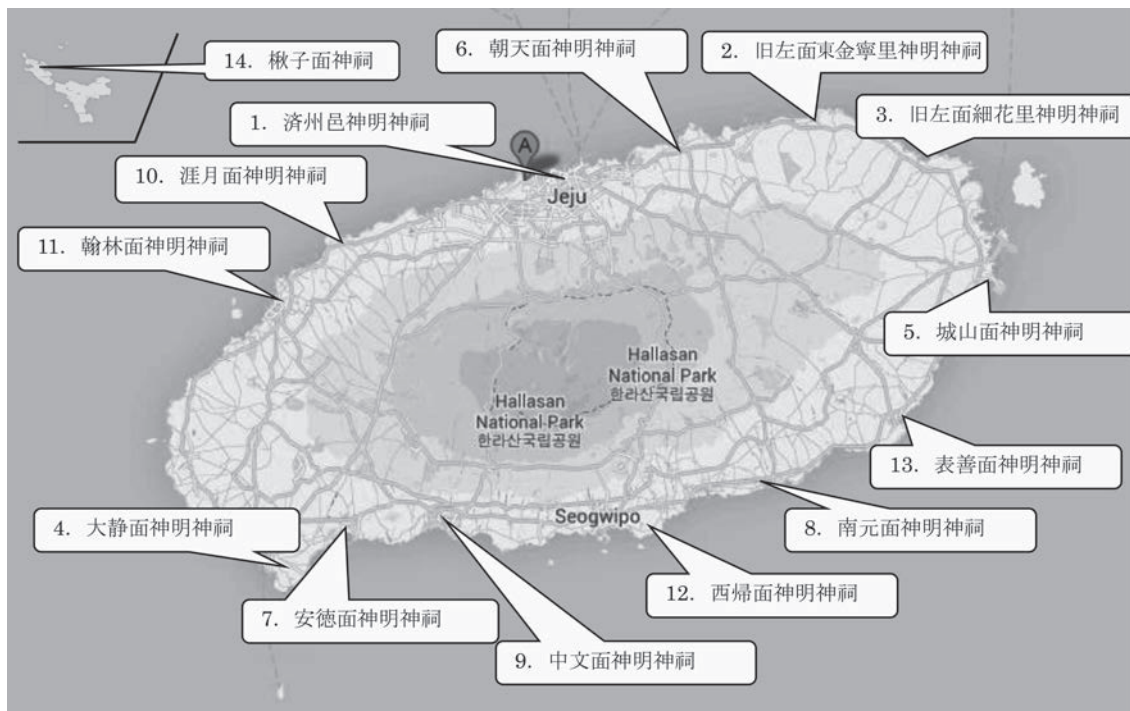


図1 濟州島の神祠分布図

※Google Map に書き入れたもの。以下、地図は Google Map を転載

日、2月25日に一斉に許可を受けて建てられた。そして残りの一つ楸子面神祠だけが少し遅れて1941年5月の許可である。図1は神祠が建てられた場所の大凡の位置を示したものである。

また14の神祠の内、13の神祠は「神明神祠」であり、楸子面神祠だけがただの「神祠」とされている。祭神も濟州邑神明神祠を除いて12の「神明神祠」は天照大神と明治天皇となっているが、楸子面の「神祠」だけは祭神が今のところ不明である（以下、神明神祠と区別された意味での神祠には「神祠」と表記する）。

この点について神祠について研究を行った栗田の見解をみておきたい。栗田の論文「植民地下朝鮮における神明神祠と〈ただの神祠〉」⁽³⁴⁾は、論文の表題からわかるように朝鮮に設置された神祠を「神明神祠」と「ただの神祠」に分けて論じている。栗田は、総督府によって許可が出された神社と神祠の数を朝鮮総督府官報を参考にして年表を作成した。栗田は、そのデータに基づき、次のように記述している。「神明神祠は1939年から急増している。地域別に見ると、その大半は全羅南道であり、同地域で1面1祠運動が積極的に実施されていることがわかる」と述べている。栗田が作成した表をみると、神明神祠は1939年に170社、1940年70社となっている。ところが1942年度の1社以外は、1941年から1945年の敗戦年度までは神明神祠の創立はみられない。これに対して、「ただの神祠」は1940年に46社と急増し、1944年までに347社が設置された。

この分析は、濟州邑神明神祠が1931年と少し早い点を除けば、濟州島に建てられた神祠の状況と符合する。

そして、栗田は、このような状況を踏まえて「ただの神祠」について次のように推測している。すなわち、「1940年度以後に数多く登場する〈ただの神祠〉は、天照大神を祭神として祀っていない私的の神祠で、稻荷信仰や金刀比羅信仰、恵比寿信仰など日本人の〈うぶな信仰〉、神仏習合的な非国家

神道的な神を祀っていた神祠である。こうした神祠を1940年頃まで総督府は許可することができなくてきたが、〈国家非常事態〉に際してやむを得ずそれらを神明神祠と区別し、〈神祠〉として朝鮮総督府から公認された」と推測している。

したがって、済州島の14の神祠の内、中心地の済州邑神明神祠のみは1931年に元島司の鈴木兵作他93名の願い出によって許可されたが、残りの13の神明神祠は注12でみたように、1938年6月頃に全羅南道で独自に計画された「皇紀2600年祭記念事業」としての一面一神祠計画に基づいて許可されたものであろう。⁽³⁵⁾ その内、12の神明神祠は、願い出の代表者が朝鮮人面長（大静面のみ日本人の慕瑟浦郵便所長）または旧面長であること、またほぼ同じ時期に許可されていることから推測されるように上からの政策により、ほぼ許可と同じ時期に建てられたものであろう。他方、神明神祠ではない楸子島の楸子面神祠は、栗田説によれば、巨文島神祠のように、早い時期から楸子島に進出して定着していた日本人の漁民によって、ある時期に神祠（私的神祠）設置されたが、それは総督府から公認を受けた神祠ではなかった。それが、1941年段階で正式に神祠として公認を受けたものと考えられる。済州島本島から離れた楸子島には今回調査に入ることはできなかったこともあって、この神社の創立年代、祭神等は今のところ不明であるが、後日、是非、調査に入りたいと考えている。尚、この楸子面神祠の願い出人筆頭者の吉村昇は日本人ではなく、楸子島漁業組合長朴昇奎が1940年5月2日に氏設定、同15日に改名（創氏改名）して吉村昇となった朝鮮人である。⁽³⁷⁾

第4章 済州島に建てられた神祠の聞き取りと跡地の現況

それでは、いよいよ本稿の目的である、済州島に建てられた神祠14社の内、離島楸子島に建てられた、楸子面神祠を除く済州本島に建てられた13の神祠についての聞き取りとその跡地の現況について、表4の番号順に報告を行う。

1 済州邑神明神祠

済州邑神明神祠は、1929年12月（1928年7月～）まで済州島司を務めていた鈴木兵作ほか93名の願い出により、1931年12月1日に済州邑（現済州市健入洞1123）に設立（許可）された。実際に



図2 「Mandeong-ro 6-gil」付近の地図

建てられたのは翌年であったようで、新島司に就任した田口禎熹（注 35 参照）は建築業者寺中鹿男を督励して建てた⁽³⁸⁾という。まだこの時期、1931 年では朝鮮では 1 面 1 社の運動は起きていないが、濟州島の中心地として、また表 1 でみたように日本人が最も多く住んでいるところから、そうした日本人を中心として建てられたものであろう。因みに、1931 年末段階の濟州邑の人口総数は 38,243 人で内地人（日本人）は 674 人（1.76%）であり、また、この 1931 年という年は、先にみたように、5 月には濟州面が濟州邑に昇格した年でもある。

朝鮮時代の 1653 年に濟州城内に拱辰楼が建てられたが、1832 年に拱辰楼を現在の地に移転して拱辰亭と呼ぶようになった。海を見晴らす小高い丘の上に建てられ、丘の下を流れる川では華やかな川遊びも行われた。この拱辰亭が建っていた場所に濟州邑神明神祠が建てられた（図 2）。1928 年に濟州邑神明神祠の建立のために拱辰亭が撤去され、1931 年 12 月 1 日に設立許可が出されたのである⁽⁴⁰⁾（注 35 参照）。

この神明神祠は 1945 年 8 月 15 日の朝鮮解放の時にも残されていたが、同年 10 月に濟州島健入洞（地元）の青年たちがこの神祠を破壊した。その後、1950 年 6 月 25 日に始まった朝鮮戦争の時に、濟州島に朝鮮本土から人々が避難して来たが、その中のメソジスト系の牧師と信徒たちが中心となり、濟州邑神明神祠の跡地に濟州邑教会を設立した。当時、この土地は日本が残した土地であったため、韓国政府に接収されていた。この教会の牧師が 1954 年にこの土地を政府から払い下げを受けようとしたが、当時の濟州邑内の儒林たちが教会を建てることに反対した。反対した理由は、この場所が先にみたような、濟州島の名勝地であったためである。

教会の牧師は名勝地と周辺環境を守ることを約束した上で土地を購入し、1956 年に写真 1 のように教会を建て、その名を濟州中央教会と名づけた。この教会は、メソジスト教会としては、濟州島における最初の教会であったといわれている。⁽⁴¹⁾

その後、2012 年 9 月、濟州地方気象庁は新しい気象庁の建物を増築するために、濟州中央教会の土地や建物を購入、2013 年 10 月に濟州中央教会は別の場所に移転する。そして 2013 年末から工事が始まるが、やはりこの段階でも、濟州文化芸術団体などの文化団体から新築工事が拱辰亭跡地にかかることから、工事の中止を求めたため、工事が中断する。私たちが調査に訪れた時点はまさにこの工事が中断されていた時期であった（写真 2）。その後、気象庁と文化団体との交渉が持たれ、気象



写真 1 撤去以前の濟州中央教会⁽⁴²⁾
出典：「濟州中央教会」から転載



写真 2 気象庁新築工事現場
2014 年 2 月 7 日 渡邊奈津子 撮影

庁側は設計を変更して、拱辰亭跡地を空地として保全するというで合意が成立した。2014年4月からそれ以外の土地を利用しての増築工事が再開され2015年3月に完工して、今日に至っている。⁽⁴³⁾

2 旧左面東金寧里神明神祠

濟州島の旧左面には、濟州島の各面の中で、この面のみ二つの神祠が建てられた。そのうちの一つが東金寧里に建てられた神明神祠であり、もう一つが次に述べる細花里に建てられた神明神祠である。いずれも面長金仁洪が願い出代表者となって、同じ日、1939年2月25日に設立許可が下りている。但し願い出人の数が、東金寧里が16人、細花里が10名と異なっている。この旧左面にどのような過程で二つの神祠が建てられたのかは不明であるが、表3にみられるように1938年末の旧左面の朝鮮人人口は4,788戸20,197人であり、濟州島の12の面の内、多い方であるが（濟州邑、翰林面、涯月面に次いで4番目）、飛びぬけて多いということもない。また、同じく日本人の数も先にみたように、9戸28人と多い方ではなく、むしろ少ない方である。いずれにしても他の事情が絡んでいるものと思われるが、今後の課題である。

まず、東金寧里神明神祠からみていこう。この神祠の現住所は、資料に残っている旧住所に基づき調べた結果、現在の濟州自治道濟州市旧左邑金寧路118-20であった（図3）。町に入ってみると敬老堂が目についたので、諸葛が訪ねて今度の調査の目的を説明したが、敬老堂に集まっていた老人たちは、その話を聞いて一瞬表情が硬くなった。

1935年に出生した老人会のメンバーK氏から調査の目的を再び質問され、諸葛が調査の目的と意義などを再度説明したが、厄介な話が持ち込まれてきたという表情を顔に浮かべた。K氏は、濟州島に日本の神祠があったことは事実だが、あまり話したくない内容であると言いながらも、日本から



図3 金寧中学校付近の地図

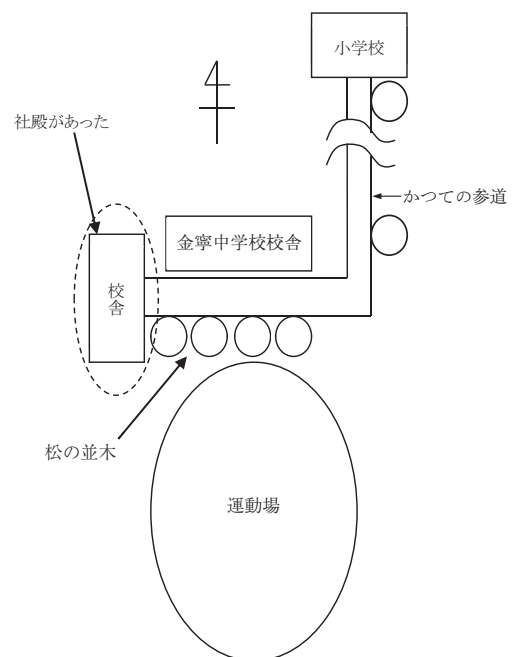


図4 東金寧里神明神祠跡地概念図
以下、概念図中、○印は松の木。点線は神祠があった場所、実線は今調査時の実際の情況。

来られたから協力すると聞き取りの許可を出してくれた。

また、集まっていた老人の中でも少し若く見える人が、「なぜ日本の首相は靖国神社に参拝する⁽⁴⁵⁾のか」と質問してきた。諸葛は、我々の調査の目的は政治的なものではなく学術的なものであると答えた。

調査メンバー一行が敬老堂の事務所に入り、本格的に聞き取りが始まった。聞き取りの対象は1935年生まれのK氏（話者1）と1929年生まれのO氏（話者2）であった。K氏は、1945年の朝鮮解放の時に小学校2年生で、O氏は、金寧中学校（後述）の4期生である。

聞き取りの内容。

質問：東金寧里神明神祠はどこに建てられたのか。

話者1：神祠は学校（小学校）と近い場所にあった。

質問：神社参拝はどのような日に行われたのか。

話者1：特別な日、つまり記念日などに行われた。

質問：天長節とか紀元節について覚えているのか。そうした日に参拝したのか。

話者1：覚えているが、確実ではない。記念日に参拝をしたと思う。

質問：神祠にどんな神様が奉られていたのか。

話者1：それは覚えていない。

質問：参拝だけだったのか。広場で遊んだりもしたのか。

話者1：参拝だけだった。

質問：神社のお祭りはふつうは春・秋だが、お店が神社の前に出たりはしなかったのか。

話者1：店はなかった。神聖な参拝だけだった。特別な日はお餅を食べたような気がする。

質問：お餅はどんなお餅。

話者1：白いお餅。学校に帰って来て餅を2〜3個もらった。餅の色は白色と色のついているものもあった。

質問：神祠の建物はいつ頃壊されたのか。

話者1：よく覚えていないが、住民たちが銘銘、資材などを持ち帰って壊した。



写真3 現在の金寧中学校
2014年2月6日 渡邊奈津子 撮影

質問：神祠の跡地は以後、どのようになったのか。

話者2：空き地として残されたが、中学校が建てられた。

質問：中学校はいつ頃建てられたのか。

（直ぐには答えは出なかったが、調査者が金寧中学校の沿革を電話で確認した結果、金寧中学校は1947年7月4日に設立されたことが分かった）

質問：いつ中学校を卒業したのか。

話者2：私はこの中学校の4期卒業生で、当時の濟州島は貧しい島だったために直ぐ中学校に入学することができなかった。小学校を卒業してから2年後に中学校へ入学した。

質問：（調査者が鳥居の写真を見せて）鳥居を覚えているか。

話者2：知らない。神祠が建っていた場所は小高い丘だった。建物はそんなに大きくはなかった。

質問：神祠の大きさはどのくらいであったか。

話者2：（この壁ぐらいと、インタビューが行われた事務所の入り口の間四方の壁を指差した）

質問：神祠の建物以外に何かあったか。

話者2：（小学校から神社まで）道の両側には松の木が植えられた。素晴らしい景色であった。今残っている松は当時のものである。参道の末には階段があり、その階段の上に神祠が建てられていた。

※聞き取りにおいては、話者は「神社」と「神祠」の区別は意識せず「神社」と表現していたが、以下、本文の聞き取り上では「神祠」と表現した。

以上の聞き取りをした後、実際に神祠が建てられていた金寧中学校を訪れた。南側に運動場がひらけ、北側に校舎が建てられていたが、神社はその北西側の校舎あたりにあったという（図4、写真3）。

ここでも一緒に同行してくれた他の複数の話者と会話が交わされた。

質問：参拝の様子について。

話者：日本人の郵便局長が神主の姿をして行事を行った。白い衣装、帽子。衣裳を着た人は2人いた。1940年頃の話。

話者：学生たちは2回拍手をしてお参りをした。



写真4 金寧中学校裏門
2014年2月6日 渡邊奈津子 撮影

質問：金寧里には日本人は何人くらい住んでいたのか。

話者：全部で5~6人。警察官、郵便局長、校長、教師1~2人。当時、金寧里の人口はおそらく1,000人程。

最後に、後述するように隣の朝天面では、神社参拝をしなかったという話も聞いたが、という質問をすると、信じられないという顔で頭を振りながら「そんな（当時の）雰囲気

では参拝するしかなかった」（話者）と答えられたのが印象的であった。

写真4は、金寧小学校の裏門側からかつての参道をみたものである。この道の両側には現在も樹齢は分からないが古い松の木が何本か立っている。後方右側の建物は小学校であるが、話者が通っていた時代の小学校と同じ位置に建っている。記念日にはそこから参道を通して神社に参拝したという。

3 旧左面細花里神明神祠

以上に述べた東金寧里神明神祠とともに、濟州島の旧左面に建てられたもう一つの神祠は細花里神明神祠である（面長全仁洪他 10名の願い出により、1939年2月25日に設立）。ここは、抗日運動のところでみたように、1931年から32年にかけて行われた海女の抗日運動の中心地であり、現在、濟州海女博物館（濟州海女抗日運動記念公園内）がある。

細花里神明神祠は、現在の濟州市旧左邑細花里の「マン丘」（「만동산」）と呼ばれている所に建てられたことを確認、現在の旧左邑事務所を訪ねて聞き取り対象者を探したが、邑事務所から紹介された対象者がたまたま不在だったために聞き取りができなかった。



写真5 細花里神明神祠の跡地、邑の会館（建設中）
2014年2月6日 渡邊奈津子 撮影



写真6 細花里神明神祠の跡地の後方、
海（港）が見える
2014年2月6日 諸葛衍 撮影

町の人に聞きながら神祠の跡地である場所を探して行ってみると、細花里神明神祠の跡地には写真5のように、建物の新築工事が行われていた。建物の用途は、邑の会館と青少年修練館であり、写真6のように海に面した小高い丘の上に建てられ、また敷地の周囲は石垣で囲まれていた。



図5 細花里付近の地図

また、この建物の反対側からは町全体を一目で見渡すことができた（図5）。

4 大静面神明神祠

大静面神明神祠は、1939年2月25日、摹瑟浦郵便所長・築山懋他37名の願い出により、旧大静面上摹里（現西帰浦市大静邑上摹里）に建てられた。済州島に建てられた14の神祠の内、早く建てられた済州邑神明神祠を除けば、唯一日本人のそして面長でも元面長でもない郵便所長が願い出代表者である。⁽⁴⁶⁾大静面の1938年末の人口構成は朝鮮人13,221人、日本人61人でいずれも済州島の面では中位の位置にある。

大静面は島内最大の平野が広がり、南は東シナ海に面する。ここに日本軍の飛行場建設が計画されたのは1926年で、30年代半ばまで10余年間に20万坪のアルトル飛行場（摹瑟浦飛行場）が建設されたが、1937年の日中全面戦争の開始とともにさらに大拡張計画が立てられ、45年の敗戦までに飛行場関連の土地面積は80万坪を占めるに至った（図6、写真9）。

この飛行場は日中戦争開始期に中国大陸、特に南京方面の海軍の出撃（渡洋爆撃）基地として使われ、また、1945年には「本土決戦」防衛の重要拠点となり、第58軍3個師団半、約7万5千名の兵力がこの地域に投入された。⁽⁴⁷⁾



図6 上摹里付近の地図

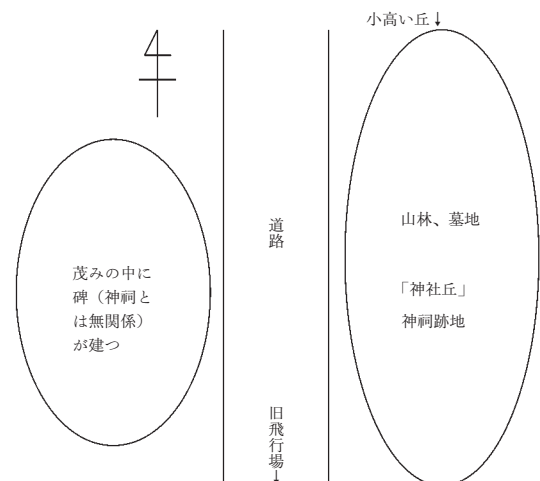


図7 大静面神明神祠跡地概念図



写真7 大静面神明神祠の跡地
2014年2月5日 諸葛衍 撮影

大静面神明神祠が建てられた丘は、地元の人達に現在も「神社丘」と呼ばれていた。大静面神明神祠の土地は、現在は山林、墓地となっている（図7）。

同行された沈揆昊教授が大静邑事務所に事前に連絡を入れ、事務所から地元の郷土研究者K氏を紹介していただき植民地期の上摹里一帯に関しての聞き取りができた。

話者：このあたり、日中戦争の南京大虐殺事件の時、日本軍基地（琴瑟浦飛行場）があり、兵士が大勢いた。ソニアッサン（松岳山）の頂きを取り囲むように高射砲の陣地があり、この道が飛行場までつながる軍用道路だった。歴史的な重要な道である。厚さ 30 cm のコンクリート道である。

日本敗戦後、1945 年 10 月頃、米海軍大佐の指揮により、敗残兵（日本軍）により武器の廃棄が行われた。ゼロ戦、赤とんぼ（訓練機）、タンク（戦車）などあらゆる兵器がこの飛行場に集まっていた。

敗戦した日本軍が残したものを改造してデジョン（大静）中学校を造った。1945 年に開校している。

質問：鳥居はあったのか。

話者：ここにあった（「神社丘」の方を指して）。しかし、破却された。

質問：基壇はあったのか。

話者：基壇も残っていない。全てが破壊された。

質問：規模はどの位。

話者：濟州島内の 13 カ所の神祠の中で濟州邑の神祠が 1 番大きい、その 2 番目がこの神祠である。これだけではない、デジョン（大静）小学校に神様が⁽⁴⁸⁾あった。東方礼拝（遥拜）をした。ここに地下防空壕もあった。現在は日本の高校生たちが修学旅行（戦争遺蹟調査）に来る。私らが解説にいく。遺蹟がたくさん残っている。

質問：どんな遺蹟。

話者：高射砲陣地などがある。

質問：（戦前の大正時代に作成された地形図を見せながら）神社の位置はどのあたり。

話者：（地図上を指差して）サンモリ（上幕里）。

質問：ハモリ（下幕里）ではないのか。

話者：（否定する）

大静面の神祠は、写真 7 の円で囲んである小高い丘の森の中にあったといわれるが、痕跡は全く見つけることができなかった。



写真 8 「神社丘」内の石垣
2014 年 2 月 5 日 沈揆昊教授が撮影



写真 9 アルトル（琴瑟浦）飛行場の全景
濟州文化芸術財団（제주문화예술재단）から転載

5 城山面神明神祠

城山面神明神祠は、1939年2月25日に面長・金鶴寶他19名の願い出により、旧城山面城山里（現西帰浦市城山邑城山里）に設立された。

城山面の1938年末の人口は朝鮮人11,508人と日本人が64人、国籍は不明であるが外国人6人であった。日本人の比率は0.6%で済州島内では中程度の比率であるが、ここの港、城山港は早くから日本人漁民の移住村が形成されたところである。また旧左面と並んで済州島海女の拠点の一つで、済州島海女の抗日運動の発祥地でもある。

現在では、この一帯は済州島の中でも有名な観光地が多数あり、中でもこの地にある城山日出峰は2000年7月18日に大韓民国天然記念物第420号と指定され、現在も多くの外国人や韓国人が集まる人気のスポットである（図8）。



図8 城山日出峰付近の地図

調査するために城山邑事務所に電話をかけて係員と交渉したが、翌日が城山邑の酺祭⁽⁴⁹⁾（ポゼ）という行事の準備と、穢れを防ぐために外部人を忌み嫌う習慣があったため、面事務所の訪問はできなかった。酺祭という儀礼は、立春後に済州島全域で行われる村の祭祀の一つであり、祭祀官は男性、また祭祀が行われる場所には、男性だけが出入りを許される祭祀であるといわれている。邑事務所の係員から今年88歳になったK氏を紹介されたが、K氏の自宅を訪問してみても不在だったので、調査者一行が独自に神祠の跡地を探しに行った。

調査団のメンバーで済州島民俗研究会の会員である金泰順氏は、かつて民俗調査をした時に聞いた



写真10 城山面神明神祠跡地
2014年2月6日 金泰順 撮影



写真11 済州島城山日出峰航空写真
出典：doopedia.co.kr から転載。

「濟州島の城山日出峰の登山路入口の左側がかつての城山面神明神祠の跡地であった」という話を思い出し、夕闇迫る強風の中、その場所を確認したが、現在は写真10の如く、野外演奏用に使われる舞台と芝生に覆われた平地になっていた。

この地は、写真11の円に囲んだ部分にみられるように、かつてホテルが建てられていた。

6 朝天面神明神祠

朝天面神明神祠は1939年2月25日、朝天面長・金汝熙他18名の願い出により設立された。場所は旧朝天面朝天里（現濟州市朝天邑朝天里新北路236-2）である。表3の如く1938年末の人口構成は、朝鮮人14,970人に対して、日本人は13人で比率は0.08%と最も少ない面であった。

この朝天の地は、濟州島の中でも最も早くから開けたところで高麗時代は涯月浦と並んで、また朝鮮時代は禾北浦と並んで濟州島の2大浦（港）の一つであった。古くから朝天館が建てられ、朝鮮半島（本土）からやってくる地方官や配流人たちも主にこの浦を利用した。半島（本土）と濟州島との間の玄関口ともいう役割をはたしていたために、富豪門閥家や儒林も多く、島内でも文化・教育先進地域として知られ、島治上重要な事件が起きる時は、この地の人士が必ずこれに関わるといわれたほどである。事実、先に抗日運動のところでみたように、濟州島の「3・1独立万歳事件」（1919年）の発祥地であり、濟州島の中では最も反日意識の強いところであった。そうしたこともあって、現在この地に濟州抗日記念館が建てられている。

また、日本の敗戦後、1948年に起きた4・3事件では「武装隊」と「討伐隊」の攻防や殺戮もひときわ激しく、犠牲者1,871人と最も多くの犠牲者を出した面⁽⁵⁰⁾である。

我々は、朝天面に入って里事務所を訪ね、そこで朝天里の敬老堂を紹介してもらった。敬老堂の老人会幹部に調査の目的を説明すると彼は激しく怒った。その怒りとは、去年（2013年）12月26日の安倍晋三首相の靖国神社参拝の問題である。彼は自ら「反日感情が強い」と自分の気持ちを吐露した。

我々は調査の意義などを説明して、ようやく聞き取りの許可を得た。



図9 朝天里付近の地図

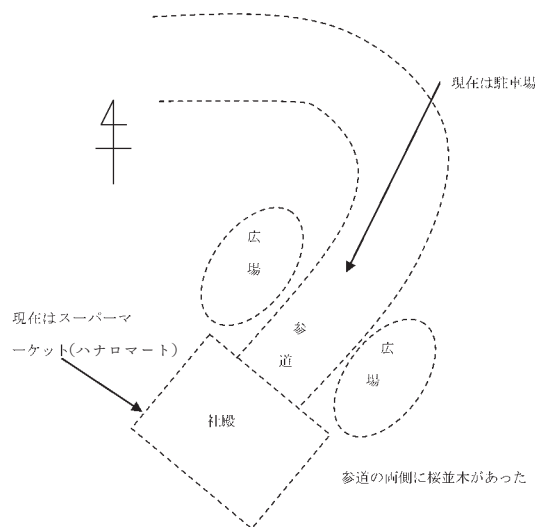


図10 朝天面神明神祠跡地概念図

老人会幹部（1935年生まれ）の証言。

質問：神祠はいつ頃建てられたか。

話者：私が5歳頃。5歳なので詳しいことはわからない。

質問：神祠を建てる時、村の人々には材木や石などを運ばせたのか。

話者：そうだと聞いた。直接見たことではない。4~5才だったので。

質問：神祠の様子は。

話者：神祠には石段があった。木でできた四角の扉があり、中には御札のようなものがあった。

質問：鏡のような物は。

話者：見てはいない。

質問：大きさは。

話者：神祠は2m 50cm くらいの高さ。

質問：燈籠はなかったのか。

話者：鳥居の後ろ、両側にあった。桜並木もあった。

質問：神祠参拝などの様子を聞かせてください。

話者：両親の反対により、学校には通わなかった。漢字だけ個人の先生（書堂の先生）に家に来てもらって学んだ。

質問：裕福な家庭に育ったのか。

話者：お金はたくさんあったが、「4・3事件」で暴徒（左翼の武装隊）に財産を没収された。

質問：学校には行かなかったが、神祠に参拝したことはあるか。

話者：父親が反対したので行かなかった。神祠に参拝したのは、村の中の責任者の子供たちである。一般の人たちはそんなに参拝しなかった。

質問：日本の警察はうるさく言わなかったのか。

話者：朝天邑には警察官が2人、その中の1人が管理した。神祠参拝に関しては日本警察も強制的にはできなかった。朝天は「頭の朝天」（知識人が多い）という言葉があり、抗日精神の強い所だ。

質問：当時、朝天邑には日本人が何人ぐらいいたのか。

話者：日本人は約20人。

質問：日本人の職業は。

話者：日本人の職業は商売人が多い。学校の先生が3人くらい。学校の沿革に書いてある。

質問：日本の軍人はいなかったのか。

話者：ハムトク（咸徳）には日本の軍人が駐屯したが、朝天にはいなかった。

質問：神祠がなくなったのはいつ頃か。

話者：光復後2~3カ月の間。

質問：それは破壊されてなくなったのか。

話者：神祠は自然になくなった。2~3か月の間に木や木材などがなくなった。わざわざ壊したことはない。放置された神祠の建物の材木を再利用するために人々が、一つ一つ剥ぎ取って各自の家で使用した。

質問：神祠に残ったものはないか。

話者：最後には大きい石（石板）が残ったが、今は何にもない。4・3暴徒が持っていった。



写真12 朝天面神明神祠跡地、現ハナロマート
2014年2月6日 渡邊奈津子 撮影



写真13 ハナロマートの裏側
2014年2月6日 諸葛衍 撮影

質問：神祠の跡地はどのように変遷したのか。

話者：「4・3事件」前までは何もなかった。ただ、旧神祠の広場で5日の市が開かれていた。その敷地の隣に面事務所があったが、「4・3事件」の時「暴徒」に焼かれた。それで、事件後、神祠跡地に面事務所が新しく建てられた。その後、今から20年～25年前に農業協同組合の建物が建てられた。

以上の聞き取りの後、我々は話者に導かれて、神祠の跡地を調査した（図9、10）。

写真12の円に囲んだ部分の建物辺りに朝天面神明神祠の社殿が建てられた。現在は農協の経営するスーパーマーケット、ハナロマートの建物が建っている。写真13は、その裏側の様子である。

この場所は少し傾斜した土地の頂上部に建てられ、裏手に回ると、海が見渡せた。

この朝天里の聞き取りの中で、1930年代後半から45年の「皇民化」政策の真ただ中の時期でも、神祠の参拝に行かなかったという証言を聞いたのは、これまでの韓国での調査では初めてのことであった。

7 安徳面神明神祠

この神祠は1939年2月25日、面長・呉龍國他13名の願い出により旧安徳面和順里（現西帰浦市安徳面和順里1150番地）に設立された。また、この地域でも神祠が建てられた丘は「神社丘」と呼ばれている。この小高い丘の直ぐ下には安徳初等学校（旧安徳小学校）があり、跡地は町を見下ろす位置にあった（図11、12）。

安徳面の1938年段階の人口構成は表3の如く、朝鮮人8,205人、日本人9人（0.1%）と濟州島の中ではそれぞれ下位に位置する面である。

現在では元神祠の階段のあった隣に新築の住宅が建てられていた（写真14）。聞き取りの対象者を探していると、偶然にも、安徳面神明神祠があった場所のすぐ隣で、1927年生まれのJ氏と出会い、貴重な聞き取りができた。

J氏の証言。



図 11 安德初等学校付近の地図

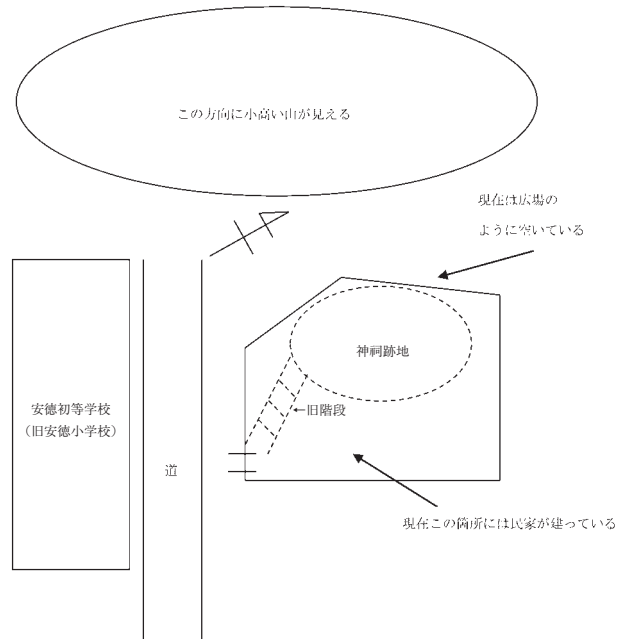


図 12 安德面神明神祠跡地概念図

質問：安德神明神祠はどこに建てられていたのか。

話者：このあたり。

質問：鳥居はどこに建てられていたか。

話者：（少し先を指差して）あの家のあたり。

質問：階段は。

話者：こちら、家の後方。

質問：神社参拝について覚えていることは。

話者：私の幼い時、学校があった。現在の安德初等学校は当時安德面安德小学校といった。

質問：いつ参拝したのか。

話者：記念日、1年に6回ぐらい。

質問：神祠にはどんな神様が祀られていたか。

話者：アマテラス。

質問：アマテラスオオミカミ（天照大神）ですか。

話者：そうだ（頷く）。

質問：どんな風に参拝したか。

話者：子供の時なので良くわからない。ただ、させられるとおりにした。

質問：当時は日本人の先生だったのか。

話者：Yという韓国人の先生が一人いた。和順里出身の先生だった。

質問：神社の大きさはどのくらい。私の背より高かった？



写真 14 安德面神明神祠の跡地
2014年2月5日 渡邊奈津子 撮影

話者：（高さ2m余の家を指差しながら）この家より大きかった。

J氏は高齢であるにもかかわらず、70～80年前のことを断片的ながら覚えていて、貴重な聞き取りができた。

8 南元面神明神祠

南元面神明神祠は1939年2月25日に面長・金日華他21名の願い出により、旧南元面南元里（現西帰浦市南元邑南元里171-1、南元中学校）に設立された。南元面の1938年末の人口構成は表3の如く、朝鮮人10,497人、日本人16人（0.01%）であった。ここも、それぞれ濟州島の面の中では下位の人口構成であり、日本人比率の点では最も少ない面であった。

まず南元邑事務所を訪ねて証言者を探した。南元邑の副邑長の協力により、南元中学校の元校長・金氏を紹介してもらった。

金氏の案内により南元中学校の校内に入ると人工芝のグラウンドが目についた。神祠の跡地は正門から入ると真正面の奥にあり（図13）、写真15のように少し土を盛って小高くした場所である。松

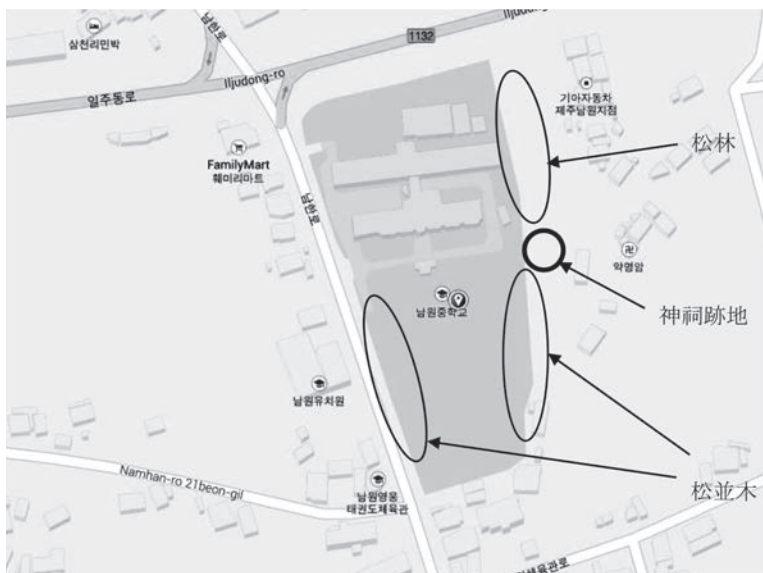


図13 南元中学校付近の地図

の木が何本か植わっており、また石碑が建てられていた。この石碑は神祠とは関係なく、戦後のもので、「本郷出身在日僑／教育篤志家記念碑」と刻まれていた。

金氏は、この丘に神祠があったことを知っていたが、神祠の解体の経過に関しては知らなかった。

一緒に案内してくれた現校長の話によれば、濟州島の植民地期に関する資料は4・3事件の



写真15 南元面神明神祠跡地。南元中学校内
2014年2月7日 渡邊奈津子 撮影

時にほとんど焼失したとのことである。

ただ、南元面神明神祠の場合、たしかにここが神祠跡地だと証言が得られたわけであるが、ここが本当に南元面神明神祠の跡地であるかどうかについては、この地が戦前も中学校の敷地であったことを考えると、奉安殿や拝礼所の可能性もあり、もう少し慎重に検証する必要があると思われる。

9 中文面神明神祠

中文面神明神祠は、1939年2月25日、面長・李斗白他29名の願い出により旧中文面中文里（現西帰浦市中文洞1498）に建てられた。この面の1938年末の人口構成は表3の如く、朝鮮人11,445人、日本人10人（0.09%）で、これも島内ではそれぞれ下位に位置する面であった。

現在その跡地にはカトリック中文教会が建てられていた。この教会は、まず1955年に信者たちによって自ら運営する信仰共同体としての「公所」がつくられ、西帰浦の中央本堂の指導の下にあったが、1988年2月にそれから分離独立して教会（本堂昇格）となったものである。この場所は、写真16のように、少し高まった丘に位置し、教会は向かって右、中文保健所が左に位置し、教会の入り口は大きな道路に面していた（図14）。

教会の協力も得て、沈教授があらかじめ連絡をとってくれていた、聞き取りの対象者であるK氏に聞き取りを行った。

K氏の証言。

質問：何年生まれですか。

話者：1929年、名前はK。昔、日本名は吉田。



写真16 中文面神明神祠の跡地に建てられたカトリック中文教会（右側）と中文保健所（左側）
2014年2月5日 金泰順 撮影



図14 中文教会付近の地図

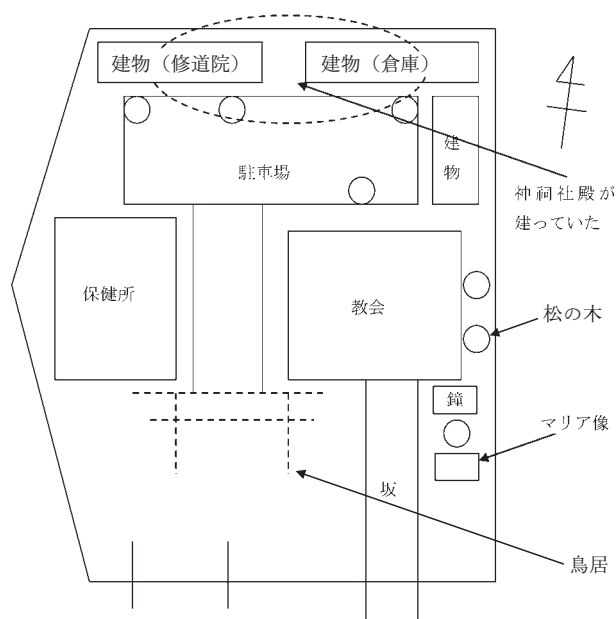


図15 中文面神明神祠跡地概念図

質問：神祠があった場所は。

話者：修道院（ここでは修道女の）とその隣の倉庫が神祠の跡地である。道路からの入り口が参道だった。

質問：鳥居はどこにあったのか。

話者：鳥居は聖堂の入り口辺りにあった。

質問：子供の時、神社参拝をしたのか。

話者：生徒は神社参拝をしなかったら学校に入ることができなかった。その時はイッサンダンという旗を立てた。

質問：1945年には小学校何年生。

話者：1945年は卒業後だった。

質問：参拝は毎日だったのか。

話者：はい。参拝をしなかったら学校に入れなかったから。チョンゼヨンの橋のあるところが小学校だった。神社の隣100～200mくらい。

質問：神社参拝はどういう風にしたのか。

話者：（しぐさをしながら）手を打ち合わせ。

質問：どんな日に参拝したのか。

話者：毎日。

質問：紀元節、天長節を知っているか。

話者：天長節は知っている。

質問：紀元節という神武天皇が日本をつくった日を知っているか。

話者：知っている。

質問：この神祠にはどんな神様が祀られていたのか。

話者：アマテラスオオミカミ（天照大神）。

質問：明治天皇が祀られていたことを覚えているか。

話者：明治天皇はこちらではない。

質問：解放後に神社がどのようにしてなくなったのか。

話者：解放されてすぐになくなった。4・3事件前だった。

質問：どういう風になくなったのか。

話者：国家権力団体によって。

質問：どんな団体。

話者：青年。

質問：どんな青年団体なのか。西北青年団……。

話者：ただ青年団体。

質問：壊したのか。

話者：なくした。

このようにK氏から聞き取りを行っている最中、さらに教会の信徒である、R氏（話者2）とG

氏（話者3）も加わって、聞き取りが続行された。

R氏は大正11年（1922年）生まれ、日本名スモハラ（李原）。

G氏は1942年生まれ。「私は同窓会会長として80年史をつくったが、その時先輩からいろいろ話を聞いたので、当時の事を知っている」とのことであった。

質問：神社参拝はいつ行ったのか。

話者2：記念日に参拝した。

質問：記念日を覚えているか。

話者2：覚えていない。

質問：天長節、紀元節を覚えているか。

話者2：覚えている。逝去したK氏が神社の総責任者だった。司会者の役割だった。祝詞を読んだが、内容はよくわからない。（ここで急に教育勅語を朗読し始める）「チンオモウニワガコウソコウソウクニヲハジムルコトコウエンニトクラタツルコトシンコウナリ……」。

質問：新嘗祭は知っているか。

話者2：わかりません。

質問：神祠にはどんな神様が祀られていたか。

話者2：アマテラスオオミカミ、「東方遥拝」といい、日本に向けて神社を建てた。東に向け建物を造った。奉安殿も建てられた。

話者3：チュンムン（中文）小学校に奉安殿があった。学生たちが教室に入る前に参拝してから教室に入った。天照大神、先生たちもお参りをして教室に入ったという。

質問：先ほど、話者から神社参拝する時「イッサダン」という旗を立てたというが、これは何。

話者3：神社参拝する時、立てた旗。

その後、3人の話者とともに入社跡地を確認しに行く（図15）。その折、この神社跡地は、「4・3事件」の関係者が虐殺された処刑場であったということ、さらに赤ちゃんの墓でもあった。よって、



写真17 中文面神明神祠の社殿の跡地（現修道院）
2014年2月5日 渡邊奈津子 撮影



写真18 中文面神明神祠の社殿の跡地
（左側修道院、右側倉庫）
2014年2月5日 諸葛衍 撮影

この場所は誰も好まなかったのが教会になったという話を聞いた。

神祠が敗戦後、青年団によって壊され、その後、その空き地が4・3事件の虐殺の場となったということ、初めて聞く話であったが複雑で重い気分させられた。

写真17、18は教会の修道院と倉庫。円で囲んだあたりに中文面神祠の社殿が建てられていたということである。

10 涯月面神明神祠

涯月面神明神祠は、1939年（昭和14年）2月25日に、面長・金益俊他22名の願い出により、旧涯月面涯月里（現濟州市涯月邑涯月里441-3）に設立された。この涯月面には1938年12月末の人口調査によると（表3）、朝鮮人は21,489人で島内では3番目に多い人口であるが、日本人はわずか11人（0.05%）で、比率的には南元面に次ぐ少ない面であった。

この涯月面にある涯月浦は、高麗時代に朝天浦と並ぶ二大浦であり、古くから開けた場所である。また、この地域は、「4・3事件」の時には左翼の武装隊の訓練所があった場所とされている。

涯月面神明神祠は海を見晴らす小高い丘の上であり（図16）、現在、写真19のように涯月保健支所の建物が建てられている。涯月保健支所の正門には2本の松が植えられている。この正門に向かう道がかつての参道であったと思われる（図17）。

涯月保健支所の協力によって少し聞き取り調査を行うことができた。調査時、保健所にいた地元の出身者から、神明神祠の隣に中学校があったとの事である。



図16 涯月保健支所付近の地図

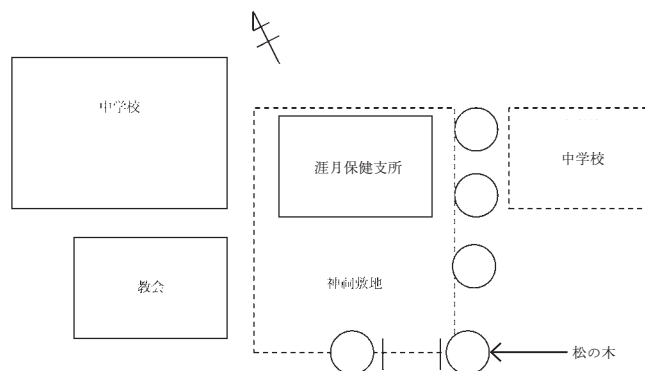


図17 涯月面神明神祠跡地概念図

また、その方の亡くなったお父さんの話によると、服も着ないでパンツ一枚で朝晩、海に行き禊を行った。祭りの時は牛1頭と餅3斗を奉納したとのことである。

戦後の神祠の解体過程に関して不明であるが、解放後に涯月面神明神祠があったこの周辺に涯月商業高等学校が建てられたという証言があった。しかし、この学校の創立は、1953年4月25日ということであるので、解体と創立は



写真19 涯月面神明神祠跡地、現涯月保健支所
2014年2月5日 渡邊奈津子 撮影

直接的には関係がないようである。

また、この敷地の周辺を調査したが、正門入口の両側に古い松の大木が2本あるくらいで、特に目立った遺構は見当たらなかった。

11 翰林面神明神祠

翰林面神明神祠は、旧翰林面翰林里（現済州市翰林邑翰林里 1284）に、1939年3月4日面長・金昶宇他13名の願い出により設立された。翰林面は漁業が盛んで（翰林港）、また日本の海軍基地も置かれていたので、表3の如く、1938年末の段階では朝鮮人30,048人と島内では済州邑に次いで2番目、日本人も144人（0.4%）と済州邑、西帰面に次いで3番目に多い面であった。

この神祠の跡地は、図19、写真20のように現在は、カトリックの翰林教会の敷地になっていた。教会の敷地はかなり広く、巨大な教会の建物と広い駐車場が目立った。教会の中で聞き取りを行ったが、信徒達のほとんどがこの地にかつて神祠があったことを知らなかった。1人の司祭のみが、翰林教会が翰林面神明神祠の跡地に建てられたことを知っていたが、その詳しい事情までは知らなかった。

その後、教会の敷地を調査した結果、図19のように敷地内に鐘楼があり、その基壇部分（写真21）にこの教会の由来を記した石板が嵌め込まれていた（写真22）。その石板の内容は以下の通りである（意識）。

「旧聖殿は、第2次世界大戦中、1945年7月6日にアメリカ軍の空襲により破壊され、1946年12



図18 翰林教会付近の地図

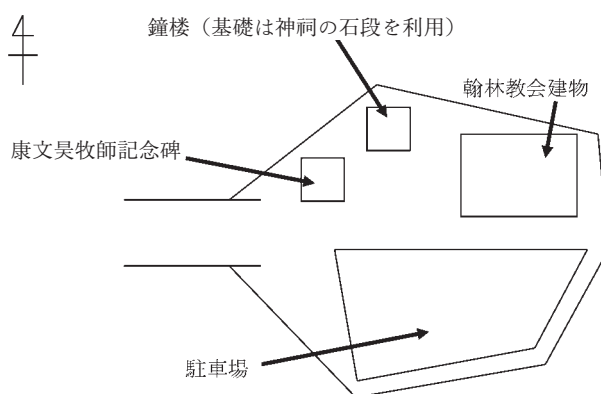


図19 翰林面神明神祠跡地概念図



写真20 翰林面神明神祠跡地、現カトリック翰林教会
2014年2月5日 中島三千男 撮影

月12日、日本の神社地に新聖殿を新築した。建築委員康文昊牧師ほか（以下略）。つまり、旧教会は、翰林面のある場所にあったが、日本の敗戦直前の7月6日に米軍の空襲により破壊された。そして、戦後の1946年12月12日に、康文昊牧師と信徒達がこの翰林面神明神祠跡地に教会を新築したというのである。翰林面には先ほどみたように日本の海軍基地が置かれていたので、爆撃を受けたのであろう。聞き取りでも「ここは戦争中、日本基地だったので米軍がここを爆撃した。



写真 21 翰林教会の鐘樓の基壇部分
2014年2月5日 渡邊奈津子 撮影



写真 22 鐘樓基壇の石板
2014年2月5日 諸葛衍 撮影

教会が破壊され、信徒もたくさん亡くなった。当時の担任司祭が米軍政庁に弁償を要求した」とあった。

翰林面神明神祠は日本の敗戦以後、朝鮮半島に建てられた他の神社と同じように、米軍政下で敵産家屋として扱われ、後、韓国カトリックの翰林教会に払い下げられることになったと考えられる（注57参照）。

尚、写真 21 は、翰林教会の鐘樓基壇部分であるが、その基壇が乗っかっている基礎（石列）は、翰林面神明神祠の石段を利用したものだということである。とすれば、これは翰林面神明神祠の唯一の遺物となる。

12 西帰面神明神祠

西帰面神明神祠は、1939年3月22日に旧西帰面西帰里（現西帰浦市西帰洞 538）に面長・金賛益他24名の願い出により建立された。西帰面（浦）の地域は古くから済州島の南半分の中心的地域であり、近代に入り日本人移住漁民村も形成された場所である。1938年末の人口構成は表3のように朝鮮人13,404人と日本人216人、外国人20人であった。朝鮮人人口は済州島では中位の位置であったが、日本人の比率は済州邑に次いで多い（1.5%）地域であった。またこの地は、先にみたよう

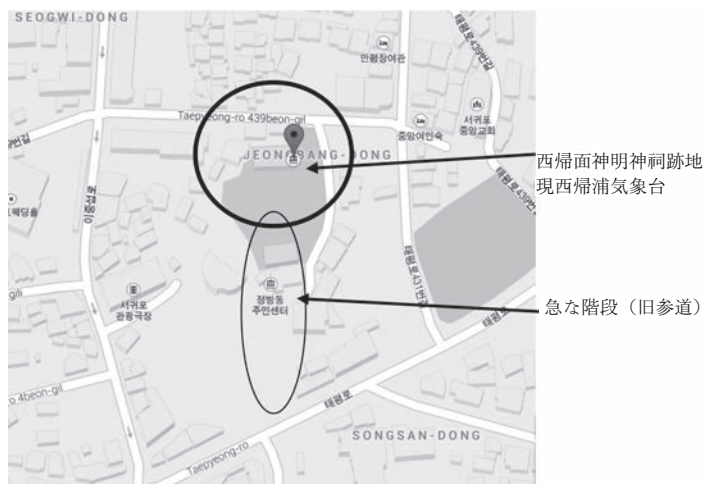


図 20 西帰浦氣象台付近の地図



写真 23 西帰面神明神祠跡地、現西帰浦氣象台
2014年2月7日 渡邊奈津子 撮影

に、済州島における三大抗日運動の一つ、宗教系の抗日運動である法井寺抗日抗争（1918年10月）が起きた場所である。

我々はまず情報収集のために西帰浦市西帰洞事務所を訪ねた。そこで西帰面神明神祠の跡地には現在、西帰浦气象台が建てられていること、また、この丘が「神社丘」と呼ばれていることが分かった。さらに、西帰浦本郷堂⁽⁵¹⁾の堂主である朴正錫氏を紹介された。

以下の聞き取りは、西帰浦本郷堂内で行われた朴氏からの聞き取りである。朴氏は、1944年生まれで現在は巫俗人として活動し、ソウル東国大学国文科を卒業した知識人でもある。

質問：何年のお生まれですか。

話者：1944年。

質問：神社の事をどうして知っているのか。

話者：私は東国大学校国文科出身であり（指導教授は韓国では著名な梁柱東博士）、1969年から民俗を勉強することになり、済州島新聞にコラムを書いた。新聞社を辞め、国会委員事務所で仕事をした。その時郷土史を勉強することになり、済州島の歴史を勉強することとなった。

私の家はもともとダジョン里である。私の家からこの神社丘まで道があった。そこに朴（ホオ）の木が2本あった。現在は1本しかない。この朴の木2本は済州島の巫俗の説話の中では夫婦神である。西帰浦の堂神（村神）でもある。700年になっている。この地は昔から神力の強い所である。この場所は「神社丘」と名づけられている。こちらの神社には日本人の先生が学生たちをつれて毎朝、参拝をしたといわれている。神社参拝は義務的であり、日本の先生が強制的にさせた。写真資料もある。ユンセチュルという写真家が撮った写真である（写真は済州島庁か済州市自然史博物館に寄贈）

質問：測候所のどの辺に昔、神祠があったのか。

話者：測候所の本館である。平屋で日本のお寺のような形だった。立派な建物ではなかったが、7～8間、20mぐらい。

質問：そんなに大きかったのか。

質問：神社はいつ頃まであったのか。

話者：神社の建物は4・3事件以前に壊された。1946、47年頃青年団が神社を壊して、慶州のチョムソンデ（瞻星台）のような展望台を建てた。村の全体が見えるような展望台を建てた。

質問：展望台はいつまで存在したのか。

記者：その展望台は1953年まであった。その後、朝鮮戦争後に避難民が大勢きたので、本郷堂（村の神堂）が避難所として提供された。

質問：1953年に展望台がなくなってどうなったのか。

話者：避難民が展望台の板をとって家（バラック）を建てて生活した。

質問：その後、展望台がなくなり、新しい建物ができたのか。

話者：それから1955年気象観測の必要性により、政府が土地を払い下げ、1958～59年にかけて観測所が建てられた（1961年1月1日業務開始）。

質問：神社の前に大きい広場があったと思うが、その広場は、その後どのように変遷したのか。



写真 24 旧西帰面神明神祠の表参道
2014年2月7日 諸葛衍 撮影



写真 25 現在の気象台の正門
2014年2月7日 諸葛衍 撮影

話者：これから神社以前のお話をする。神社が建てられる以前にはポゼドンサン⁽⁵²⁾（醮祭丘、村の祭祀を奉納する丘）だった。日本時代に当時の面長が神社を建てるために、現在の石の階段を造った。よってポゼドンサン（醮祭丘）はなくなり、西帰浦は現在もポゼドンサンがないし、ポゼ（醮祭）も奉納しない。

以上が朴氏との聞き取りであるが、ここで注目されるのは、神社が建てられた場所が、朴の木の話にもあったように、もともと神聖な場所、神力の強い地域であり、具体的にはポゼ（醮祭）を奉納する、ポゼドンサン（醮祭丘、村の祭祀を奉納する丘）だったということである。

この神祠が建てられた場所が、朝鮮の伝統的な祭祀の場所であったという話は、この済州島調査だけではなく、かつて我々が行った全羅南道和順郡の調査でも、私たちが予想をしながらも実際には聞かれなかった話である。その意味で、この西帰面神明神祠についての朴氏のお話は貴重なものであった。

聞き取りが終わり、朴氏に案内されて気象台に赴いたが、写真 23 のように広い敷地を持っていて、現在確認できる済州島の神祠の跡地の中では、済州邑神明神祠に次ぐ大きさであった。

写真 24 は、気象台の下部にある、西帰洞事務所から下（海側）に向けて撮影した写真であり、この石の階段がかつての西帰面神明神祠の参道である（図 20 参照）。

気象台からは西帰浦市内中心部と西帰浦港などが一目で見渡せ、西帰浦の素晴らしい景観が見られる場所であった。

13 表善面神明神祠

表善面神明神祠は 1939 年 3 月 23 日、旧表善面表善里（現、西帰浦市表善面表善里 317-1）に、面長・宋仁錫他 10 名の願い出によって建てられた。表善面の 1938 年末の人口構成は表 3 の如く、朝鮮人 6,720 人、日本人 26 人である。日本人の数は決して多い方ではないが、朝鮮人人口が済州島では一番少ない面であるので、日本人比率は 0.4% と島内では中位の位置にあった。

沈揆昊教授の知人の案内により、表善中学校の校内に赴いたが、そこはどうかやら奉安殿の跡地であったようで、結局神祠跡地は確認出来ずに終わった。あらためて協力を得ようと表善面事務所に向か



図 21 表善里付近の地図



図 22 表善中学校付近の地図



写真 26 表善神明神祠の跡地、右手の森
2014年2月7日 渡邊奈津子 撮影



写真 27 表善神明神祠の跡地から表善中学校を見る
2014年2月7日 諸葛衍 撮影

う途中、沈教授の知人から電話があって、敬老堂に居た表善面神明神祠の跡地を知っている古老を紹介された。

古老の話によれば、表善中学校の校内ではなくて、図 22、写真 26、27 のように表善中学校に隣接する小さな森が表善面神明神祠の跡地であるとのことであった。

この方は小学校1年生から卒業するまでこの地に居たが、神祠はコンクリートで造られ、広さは1坪ぐらいで、高さは1.5~2m ぐらい、鳥居はなかったと証言された。また、朝鮮の解放後にこの跡地は畑になり、隣接してあった表善小学校は1949年9月9日に表善高等公民学校として設立許可を得て開校、その後、1951年10月14日表善中学校が設立認可を得て、同月16日に開校したと言われた。写真 27 の奥に見られる建物が表善中学校の校舎である。

神祠の解体のことについては、覚えていないということだった。

ただ、鳥居はなかったと証言されたことや済州島内の神祠跡地の聞き取りの中で初めて聞くコンクリート造りであったことなどは、さらに確認を深める必要があると感じた。

おわりに

濟州島に設置された神祠は、第3章で述べた通り、濟州邑神明神祠を除けば、ほとんどが同じ時期（1939年）に設置されている。旧朝鮮では1930年代後半から皇民化政策が強化され、その中で一面（村）一社政策が推進され、特に全羅南道では、ほぼ一面一神祠政策が実行されたが、この濟州島においてもそのことは確認できた。

また、このことと関連するが、1930年代後半、濟州島を含む朝鮮半島に爆発的に建てられた多くの神祠は、日本人居住者が自らの信仰のために建てたというよりも、注12で指摘したように「皇紀二千六百年記念事業」の一環として朝鮮人に神社参拝を強制するために、朝鮮総督府の上からの指示に基づいて建てられたということである。

このことは、表3でもみたように、この時期（1939年度）、濟州邑や翰林面、大静面、西帰面、城山面を除けば、残りの7面は戸数10戸以下の地域であり、人口比率も0.5%に満たない比率である。また、1931年12月に建てられた濟州邑神明神祠を除く11の神明神祠の内、大静面神明神祠を除いて朝鮮人面長を願い出代表者とする神祠に一斉に設立許可が出ているのである。これらのことは、明らかに政策的に上から建てられた神祠であることを物語っているといえよう。

千葉正士氏は海外神社を、日本人居住者（移住者、居留民）が自らの信仰のために建てた居留民設置神社と、総督府が朝鮮神宮など現地人に神社信仰（天皇崇拜）を押しつける為⁽⁵³⁾に建てた規模の大きい、官幣社や国幣社などの社格を持つ政府設置神社とに区分したが、一面一社政策によって建てられた規模の小さい神祠もその意味では政府設置神社といえよう。この点は千葉氏も見落としていた点であるが、政府設置神社は社格を持つ大きな神社と規模の小さい、「神社」とは区別された神祠の2類型があるということである。

さて、今回の13神祠跡地の調査で何らかの聞き取りができたのは、旧左面細花里と城山面の2神祠を除く11の神祠であったが、その中でも神社参拝に関する聞き取りができたのは、旧左面東金寧里、朝天面、安徳面、中文面、涯月面の5神明神祠であった。

この中で朝天面の話者のように、父親が反対したので行かなかった。学校の生徒の中でも、神祠に参拝したのは、村の中の責任者の子どもたちであり、一般の人たちはそんなに参拝しなかった、という話もあったが、他方、中文面の話者のように毎日参拝した、子供は神社参拝をしなれば学校に入ることはできなかった、あるいは旧左面東金寧里や安徳面の話者のように「特別な日、記念日」に、1年で6回ぐらい参拝したという話もあった。

また、記念日については中文面の話者のように「テンチョウセツ」という言葉を自ら口に出した場合もある。因みにこの方は「東方遥拝」という事も知っていたし、さらに教育勅語の冒頭「チンオモウニ、ワガ、コウソコウソウ……」をも諳んじていた。

また、旧左面東金寧里の話者は「特別な日」には白いお餅と色の付いたお餅をもらった、2回拍手をしてお参りした、日本人の郵便局長が神主の姿をして行事を行ったなどの話もされた。「特別な日」にお餅をもらったという記憶は、旧朝鮮の神社調査の聞き取りで時々出てくる話である。戦前の日本の場合もそうであるが、子どもたちにとっては紅白の餅（饅頭）は強い印象として残ったようである。逆に、日本の場合、子供の印象としてもう一つ強く残っているのは、神社の祭礼の折の夜店の記

憶であるが、ここではその記憶はなく「神聖な参拝」だけだったとのことであった。

神祠に祀られている神について、「アマテラス」あるいは「アマテラスオオミカミ」と自ら答えてくれたのは、安徳面と中文面の話者である。もう一つの祭神である明治天皇の名前は出てこず、中文面の話者のようにこちらからのサジェスションにも関わらず「明治天皇はこちらではない」とはっきり否定された。

神祠が建てられた場所については、朝鮮半島全体に共通することであるが、その多くが小高い丘、集落を見下ろす、また集落から見上げる位置に建てられたが、濟州島の場合にはそれに加えて、海を見渡す、海からも見える位置に建てられたという特色を持つ。また西帰面神明神祠のように、単に地理的にそのような場所に建てられただけではなく、その集落の伝統的な祭祀の場所、ポゼ（酹祭）を奉納するポゼドンサン（酹祭丘、村の祭祀を奉納する丘）に神祠が建てられたという話は旧朝鮮の神社調査の中で想定はしながらも実際には確認することはできなかったものである。それが今回初めて確認できた。また、濟州邑神明神祠は、朝鮮時代の伝統的な建築物（拱辰楼）を破壊して建てられたものであった。

表5は濟州島内の神明神祠跡地のその後を一覧表にしたものである。濟州本島内の13の神明神祠は、日本の敗戦による朝鮮の解放後、間もなく無くなったようである。13の神祠の内、八つの神祠では無くなった状況は不明であったが、残り五つの内、青年（団）によって壊されたという例が三つ（濟州邑神明神祠、中文面神明神祠、西帰面神明神祠）⁽⁵⁵⁾あった。

神祠跡地の再利用については、キリスト教会として利用されているのは、濟州邑神明神祠（メソジストの濟州中央教会、2013年10月まで）、翰林面神明神祠（カトリック翰林教会）、中文面神明神祠（カトリック中文教会）⁽⁵⁶⁾の3カ所。また学校施設・中学校として利用されているのが旧左面東金寧里神明神祠（金寧中学校）、南元面神明神祠（南元中学校）の2カ所。その他の公共施設として利用されているのは濟州邑神明神祠（濟州中央教会の後に増築された濟州地方気象庁）、旧左面細花里神明神祠（邑の会館、青少年修練館）、西帰浦神明神祠（西帰浦気象台）、涯月神明神祠（涯月保健支所）の4カ所。民間団体が利用しているのが朝天面神明神祠（スーパーマーケット）、城山神明神祠（野外劇場）の2カ所。残りの大静面神明神祠は山林、表善面神明神祠は小さな森、安徳面神明神祠は住宅地となっている。

キリスト教会3カ所というのがやや目立つが、これは米軍政下、また「韓国」独立後もアメリカを後ろ楯とする李承晩政権によるさまざまな優遇措置を背景に建てられたものであろう。⁽⁵⁷⁾

また、神祠跡地が現在においても3カ所で「神社丘」と言われていることが気になる。神祠が現実に存在したのはいずれも1939年2月～3月から1945年8月までの僅か6年余の期間である。この6年余の間に濟州島の人にとって記憶から消し難い濃密な神祠（神社）との関わりが総督府から求められたのであろうか。

以上、今回の調査の課題であった濟州島内に建てられた13の神祠の跡地の変遷・現況に関して、不十分ではあるがある程度確認することができたし、併せて植民地支配下の朝鮮人に対する神社参拝の強制に関わる聞き取りもそれなりに行うことができた。その意味でたいへん有意義な調査であったと言えよう。

最後に、今後の課題について述べておこう。今回の調査は実質5日間で、13の神祠跡地をまわっ

表5 済州島内の神明神祠跡地のその後

	神祠名	戦後直後の状況	その後の利用状況	その他
1	済州邑神明神祠	1945年10月健入洞(地元)の青年たちが破壊	済州中央教会(メソジスト系、1956年)→済州道気象庁増築→発掘調査中→(2015年完工)	神祠時代の樺(ケヤキ)の古木が残る(注54)
2	旧左面東金寧里神明神祠	住民たちが銘々、資材などを持ち帰って壊した	1947年金寧中学校設立	
3	旧左面細花里神明神祠	不明	現在、公共施設(邑の会館、青少年修練館)建設中	跡地に向かって坂道を上がる(旧参道か)
4	大静面神明神祠	不明	山林	跡地の丘は、現在でも「神社丘」と呼ばれる
5	城山面神明神祠	不明	一時ホテルが建てられたが、現在は野外演奏場の舞台	
6	朝天面神明神祠	戦後、2~3か月の間に付近の住民が建物の資材をはぎ取って行ってなくなった。後に大きな石版だけが残ったが、これも「4・3事件」のとき「暴徒」が持って行った	旧神祠の広場で「五日の市」が開かれていた。「4・3事件」後、面事務所が新築、今から20~25年前に農協の建物が建てられ、現在は農協のスーパー、「ハナロマート」が建つ	
7	安徳面神明神祠	不明	住宅地	跡地の丘は、現在でも「神社丘」と呼ばれる
8	南元面神明神祠	不明	南元中学校の敷地内	
9	中文面神明神祠	青年団体により破壊。空地は「4.3事件」の処刑場、赤子の墓	1955年「公所」→1988年に昇格してカトリック中文教会	
10	涯月面神明神祠	不明	涯月保健支所	保健所の入り口、門の傍に二本の松の古木がある。旧参道の入り口か
11	翰林面神明神祠	不明	米軍の爆撃によって破壊されたカトリック翰林教会が、1946年12月、神祠跡地に移転再建	教会敷地内の鐘楼基壇の基礎は、神明神祠の石段を利用
12	西帰面神明神祠	青年団が壊す	展望台→朝鮮戦争の避難民のバラック→観測所(1961年業務開始)→西帰浦気象台	跡地の丘は、現在でも「神社丘」と呼ばれる。旧参道(石段)が残る
13	表善面神明神祠	不明、神祠の跡地は畑地になる	小さな森	

たのであるが、資料収集の点で十分とはいえず、また聞き取り対象者も少数で限られたものであった。また、旧左面細花里神明神祠、城山面神明神祠については全く聞き取りができなかったし、表善面神明神祠、南元面神明神祠についても、もう少し詳しく調べる必要があると思っている。

さらに、済州本島から離れ、済州島の神祠の中で唯一、神明神祠でなかった楸子面神祠についての調査も残されている。

また大きな課題としては、済州島の人たちの神社参拝が行政や学校教育を通じた上からの強制的な参拝であることは間違いなことではあるが、それにしても済州島の人たちは神社というものに対して、どのような感覚を持っていたのだろうか、という点も深めてみたい点である。

この点について、私たちは調査の最終日、済州市在住の著名な民俗学者・高光敏先生の研究所を訪れ、貴重な話を聞く機会を得た。

済州島は歴史的・文化的にも半島(大陸)と異なるものを持っていることは最初の方で述べたが、それと関連して、済州島は巫俗の島、祈りの島、神々の故郷といわれるほどシャーマニズム系統の巫俗信仰が今日でも根強く残っている島である。その祈りの聖地を堂(ダン)といい、祭祀者であるシ

ムバン（神房、本土の巫堂にあたる）によって祭祀が執り行われる。堂は通常、村の静かな場所、丘の上や崖の下、あるいは海辺に位置し、大木（神木）や平たい岩、あるいはそれに準ずる祭壇が横たわっている。沖縄の御嶽と共通点を持つものである。そして、濟州島には今日でも 300 を超える堂があるといわれるほど様々な性格の堂があるが、中心的なものが村・共同体の神を祀る本郷堂と呼ばれるものである。

こうした前提のもとに、高先生は「濟州島の人々は堂であれ、神社であれどちらも神様がいるところだと思っていた。怖がっていた。だから神社に対して悪いことをすると罰が当たると思っていた。しかし、濟州島の人々は神社の神様の存在を認めながらも、神社は自分たちの信仰の対象ではない。自分たちには堂があるから」と言われた。

こうした、濟州島に住む人々の神観念、心性と、日本（人）によって持ち込まれた神社の神の問題、植民地下の朝鮮において、総督府もその結合に苦勞した、朝鮮の村落祭祀・洞祭と近代日本の神社崇拜・敬神崇祖の観念との比較検討の問題である。この問題はなかなか難しい問題であるが、大きな課題である。⁽⁵⁸⁾

分担

本稿は、調査終了後、3回にわたって調査者4名の共同研究会を持って討論、確認したものの成果である。原稿化にあたっては、諸葛が下原稿を書き、それに金が聞き取り内容、渡邊が写真、地図、跡地概念図を入れ込み、最後に中島が朝鮮総督府関係の資料、朝鮮で発行された新聞資料等を組み込むとともに、全体を監修した。

謝辞

今回の濟州島調査に関しては、濟州国際大学教授で中国文学の研究者（中国の最初のノーベル賞作家莫言の韓国語翻訳者としても著名）であり、また「仮面劇団두루니눔（ドルナムム）」を主宰する沈揆昊教授に大変お世話になった。我々の現地調査に先立ち、濟州島内に建てられた13の神祠の場所については、沈先生の事前の調査によってほぼ確定できていたし、また聞き取り対象者をあらかじめ準備していただいていた箇所も少なくなかった。我々の調査が短期間の内に、13の神祠跡地をほぼ確定することができ、また、実り多い聞き取り調査ができたのも偏に沈先生のお蔭である。またこの過程で濟州島文化研究所の高暎子氏にも大変お世話になった。厚く感謝申し上げる次第である。

また、原稿化する上で、研究協力者の金山浩氏には総督府資料の検索などで大変お世話になった。深く感謝申し上げる次第である。

最後に、日本の植民地支配の負の遺産ともいべき神社、またその問題と今日における日本の総理大臣の靖国神社参拝が絡み合って、強い忌避感を持ちあまり話題にしたいくないという気持ちを抑えて、我々の神社調査の聞き取りに応じていただいた方、また跡地の場所を教えてくださいました方、さらに聞き取り対象者としてふさわしい方を紹介して下さった方、お名前をいちいち記すことは省かせていただくが、濟州島の多くの方々に本当にお世話になった。深甚の謝意を表する次第である。

注

(1) 神祠とは、台湾における「社」や「祠」と同じように、小規模の神社のことであり、1917年3月22日の「神祠に関する件」という総督府令第21号で、「神社ニ非スシテ公衆ニ参拝セシムル為神祇ヲ奉祠スルモノ」(第1条)と定義され(『朝鮮総督府官報』第1387号、1917年3月22日)、崇敬者10人以上の連署を整えた上で、総督府の許可を受けることにより、設置が認められた。但し、「神社ニ非スシテ」とあるが、

それは外形上（体裁上）の区別であって、同時に出された各道長官宛政務総監通牒「神祠に関する規則を定むる件」（内秘71号）では「地方住民の事情に依り一般神社の体裁を具備せる神社を創立難致場所に限り其の地方住民に敬神上の満足を与ふる為特例を設けられたる義」と位置づけ、「将来神社創立」をも視野に入れ、神祠と雖も「神祇の尊厳を瀆すが如き」のないように指示している。2年前、即ち1915年8月16日に出された「神社寺院規則」（朝鮮総督府令第82号、『朝鮮総督府官報』第911号、1915年8月16日）に規定された、「神社」と比較してみると、「神社」の「創立」を申請する時の崇敬者連署の数は30人以上で、神祠の「設立」の場合10人以上であった（「神社」＝「創立」、神祠＝「設立」の区別もなされている）。また「神社」の場合は「神殿及拝殿を備ふべし」と規定（第3条）されているが、神祠の場合はこの建物についての具体的な規定はない。実際多くの神祠は拝殿を備えていなかった。また、「神社」は神職の存在を前提にしていたが（第12条）、神祠にあっては神職はおらず、祭祀等は「神社」の神職に委託したり、またそれさえできない場合は同長官の認可を受ければ良く（第7条）、役人や学校教員など、神職の資格を持たない者がその任に当たった。

- (2) 但し、神祠を14社としたが、済州邑には、紀元2600年祭の記念行事として神社造営計画があった。菌田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』（吉川弘文館、2004年7月）の巻末付表「紀元二千六百年記念事業海外神社の部（神社・神祠・社造営計画）」（佐藤弘毅編）には、「郡名ほか・済州島済州邑、事業主体・済州島済州邑、事業名称・済州神社造営、事業年度・昭和15年-18年、適要・多年の懸案たり済州神社を造営し本島守護神として二五万島民の敬神の対象たらしむるため、済州神社造営期成会を組織し寄付金を募り昭和18年度之を完成することとす。」と記載されている。また、おそらくこれのもと史料となったと思われるが、内閣記録保存部局『紀元二千六百年祝典記録・第10冊第十一輯奉祝記念事業 第五編 其ノ他内外各地ニ於ケル事業 第二章 外地』476頁、1940（昭和15）年（アジア歴史資料センター）には「郡府邑面名・済州邑、事業ノ名称・済州神社造営、事業年度・自昭和15年度至昭和18年度、経費・50,000（円）、財源・寄付金、適要・（以下略。上記『神道史大辞典』所収史料に同じ）と記載されている。

この神社造営計画は済州邑の神明神祠を整備して神社とするのか、それともそれとは別に新しく神社を造営するのか、恐らく前者だと思われるが、詳細は今のところ不明である。また、朝鮮総督府の史料や新聞資料にも管見の限り、この済州神社の事項は見いだせない。したがって、現在のところ済州島には神社が建てられなかったとして済州島管轄下の神祠の数を14とした。

- (3) 研究史については津田良樹、中島三千男、金花子、川村武史「旧朝鮮の神社跡地調査とその検討——全羅南道、和順郡を中心に——」（年報『人類文化研究のための非文字資料の体系化』第3号、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議 2006年3月）の第1章（中島三千男執筆）を参照。

特に朝鮮の神祠については、近年、青野正明が「朝鮮総督府による神社・神祠の増設政策——村落祭祀利用の視点から——」（桃山学院大学総合研究所『国際文化論集』39号、2009年3月、以下青野論文1と略記）、「朝鮮総督府による神社・神祠の増設政策（中編）——一面一神社・神祠設置方針を中心に——」（同上、41号、2009年12月、以下青野論文2と略記）、「朝鮮総督府による神社・神祠の増設政策（後編）——江原道の「里洞祠の復古改新」策——」（同上、47号、2013年3月、以下青野論文3と略記）など、精力的に深めている。尚、以上の3論文は青野正明『帝国神道の形成——植民地朝鮮と国家神道の論理』（岩波書店、2015年7月）の第4章、第5章に収録されている。

- (4) 中島三千男「台湾の神社跡を訪ねて——旧花蓮港庁を中心に——」（『歴史と民俗』10号、神奈川大学日本常民文化研究所、1993年8月）
- (5) 中島三千男『海外神社跡地の景観変容——さまざまな現在——』（御茶の水書房、2013年3月）
- (6) 津田良樹、中島三千男、堀内寛晃「海外神社跡地のデータベース構築」（『環境に刻印された人間活動および災害の痕跡解説』、神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議、2007年12月）。URLは<http://www.himoji.jp/himoji/database/db04/about.html>
- (7) 注(3)津田良樹他論文及び中島三千男他「旧朝鮮北部（現朝鮮民主主義人民共和国）の神社跡地を訪ねて」（『年報 非文字資料研究』第11号、神奈川大学日本常民文化研究所 非文字資料研究センター、

2015年3月)

- (8) この他、瀧元望の『隔ての壁を取り除くために』(プレイズ出版、2011年)がある。
- (9) 中原大學建築研究所『市定古蹟 新竹神社 調査研究暨修復計劃』(新竹市政府文化局、2003年)、同大学建築學系『桃園縣忠烈文化館 文化景觀調查及研究資源應用計劃 成果報告書』(桃園縣政府文化局、2007年)、黃士娟「台湾の神社とその跡地について」(『海外神社跡地から見た景觀の持続と変容』所収、神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター、2015年3月)、林承偉「戦後台湾における神社建築の処理政策と金瓜石神社の再利用計画について」(『ニューズレター非文字資料研究』32号所収、「海外神社とは? 史料と写真が語るもの」、2014年7月)。旧樺太については前田孝和「旧樺太時代の神社について——併せて北方領土の神社について——」(『年報 非文字資料研究』11号、2015年3月)、Igor Anatolievich SAMARIN「サハリンにおける〈カラフト〉期の日本文化・歴史遺産を保存し利用するという視点からの神社遺構の現況について」(同)などがある。
- (10) 諸葛衍「解放後の朝鮮神宮の解体とその跡地利用について」(ニューズレター『非文字資料研究 No.32』、「海外神社とは? 史料と写真が語るもの——台湾と韓国の事例を中心に——2013年度 非文字資料研究センター 第4回公開研究会」、2014年7月)
- (11) 小山文雄『神社と朝鮮』(朝鮮仏教社、1934年)108~109頁
- (12) 注3青野論文が明らかにしたように、1938年9月に打ち出した「一面一神社」を「一面一祠」という形で行うことを総督府が決めたのは1939年2月半ば頃であること、またその前提として、1938年6月頃に全羅南道で「皇紀2600年記念事業」の一環として立てられた「一面一神祠」計画とその実践があった。紀元(皇紀)2600年祭との関わりを示す史料を紹介すると「全南道では二五〇万道民に対する国体明徴、敬神崇祖觀念の涵養を図ろうと、皇紀二六〇〇年記念事業として一面一神社神祠の計画を立て……(後略)」(『毎日新報』1938年8月9日付)、「全南道では敬神思想の普及徹底を期するために、すでに一面一祠制度を実現するために尽力してきた。昭和十五年、皇紀二六〇〇年の紀元節までにはすべて完成する考えで……、そのうち大部分は十四年度に竣工するという。(後略)」(『毎日新報』12月22日付)(注3青野論文2の160~161頁)
- (13) 李英勲「日帝下の濟州島の人口變動に関する研究」(高麗大学『濟州歴史近現代』1989年)24頁<이영훈「일제하의 제주도 인구변동에 관한 연구」고려대학『제주역사 근현대』1989년 24p>
- (14) 『濟民日報』「韓末・日帝19——一周道路開設と村落中心の移動」(はなし濟州歴史86)2001年9月3日<제민일보 [한말·일제 19—일주도로 개설과 촌락중심의 이동] (이야기 제주역사—86) 2001년 9월 3일>
- 「はなし濟州歴史」は、2001年から『濟民日報』に連載されたシリーズ。
- (15) 『濟州島勢要覽』、アジア歴史資料センター、1939年、23~24頁
- (16) 光復会濟州支部「1930年代における濟州島の社会經濟狀況」(『濟州抗日農民組合運動』2005年)49頁<광복회 제주지부 [1930년대 제주도사회 경제현황] (『제주 항일 농민조합 운동』2005년) 49P>
- (17) 注15『濟州島勢要覽』51~80頁
- (18) 注14『濟民日報』「韓末・日帝19——一周道路開設と村落中心の移動」参照
- (19) 『濟民日報』「朝から晩まで苦勞しながら働いた」(はなし濟州歴史—94)2001年11月3日<제민일보 [아침부터 저녁까지 까맣게 일했다] (이야기 제주역사—94) 2001년 11월 3일>
- (20) 濟州抗日記念館(濟州市朝天邑新北路303)解説パンフレット
- (21) 『濟民日報』「韓末・日帝20——日帝初期の宗教狀況と法井寺抗争」(はなし濟州歴史—87)2001年9月10日<제민일보 [한말·일제 20—일제초기의 종교현황과 법정사항쟁] (이야기 제주역사—87) 2001년 9월 10일>
- (22) 国立濟州博物館『濟州の歴史と文化』23頁、2009年<국립제주박물관『제주의 역사와 문화』23p 2009년>
- (23) 注16光復会濟州支部「1930年代における濟州島の社会經濟狀況」19~20頁

- (24) 以上の濟州島海女の抗日運動の叙述は、注 16 「1930 年代における濟州島の社会経済状況」の 43～47 頁に拠る。
- (25) この名称については、この出来事をどうみるかによって、「四・三」、「四・三事件」、「四・三蜂起」、「四・三抗争」、「四・三暴動」など、種々の名称があるが、ここでは、「濟州四・三事件真相究明及び犠牲者名誉回復に関する特別法」（2000 年 1 月 12 日制定、法律第 6117 号）に拠った。文京洙編、金石範・金時鐘著『増補 なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか——濟州島四・三事件の記憶と文学』296 頁（平凡社ライブラリー 828、2015 年 4 月）。以下、「4・3 事件」に関する叙述は本書、とくに文京洙「解説——濟州島 4・3 事件とその後」に負うところが多い。
- (26) 同上、特別法第 2 条「定義」（同上 296 頁）
- (27) 濟州 4・3 事件真相究明及び犠牲者名誉回復委員会「濟州 4・3 事件真相調査報告書」2003 年 12 月、107～109 頁〈제주 4·3 사건 진상규명 및 희생자 명예회복위원회「제주 4·3 사건 진상조사 보고서」2003 년 12 월, 107p~109p〉、강준만『韓國現代史散步』「1940 年代編 2 卷」人物と思想 2004 年 20～21 頁〈강준만『한국현대사산책』「1940 년대편 2 권」인물과사상 2004 년 20p~21P〉
- (28) 日本の敗戦後、朝鮮は米ソの分割占領のもとに置かれたが、北朝鮮で臨時人民委員会によって強硬的進められた土地改革や重要産業の国有化、男女の平等などを盛り込んだ「民主改革」の進展は、100 万人といわれる北から南への人口流出（いわゆる「越南民」）を招いた。1946 年に越南した北朝鮮の各道別の青年団体が、反共闘争を効率的に遂行するために鮮于基聖を代表として結成した右翼青年団体である。後に 1947 年 9 月にさらに右翼青年の再結集が図られ大同青年団が結成されたが、残留派が文鳳済を団長に引き続き西北青年団を名乗った。以後、彼らは徹底した反共主義者として米軍や韓国軍、警察や「右翼」による、「左翼」攻撃の先頭に立った。尚、西北青年団の「西北」とは、李氏朝時代から北部朝鮮の主要都市平壤がある方向を「西北地方」と呼んでいたことに由来する。注 25 文京洙編『増補 なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』256 頁、280 頁、金時鐘『朝鮮と日本に生きる——濟州島から猪飼野へ』159 頁（岩波新書、2015 年 2 月）など参照。
- (29) 米ソの冷戦が激化する中、全朝鮮での総選挙が不可能となり、米軍政は南だけの「単独選挙」を 48 年 5 月 10 日に実施することを決めた。
- (30) 徐重錫「1948～1950 民主主義・民族主義そして反共主義」（『韓國現代民族運動研究 2』歴史批評社、1996 年）175 頁〈서중석 [1948~1950 민주주의·민족주의 그리고 반공주의] (『한국현대 민족운동 연구 2』역사비평사, 1996 년) 175p〉
- (31) 濟州 4・3 事件真相委員会『濟州 4・3 の悲しい証言 8』2006 年 12 月、383～384 頁〈제주 4·3 사건 진상위원회 [제주 4·3 의 슬픈 증언 8] 2006 년 12 월, 383~384p〉
- (32) 김영주「4·3 犠牲者、21% が女性」（『中央日報』、2010 年 8 月 13 日）〈김영주 [4·3 희생자, 21% 가 여성] (『중앙일보』, 2010 년 8 월 13 일)〉
- (33) 「その時、今日〈在日朝鮮人 北送事業が始まった〉」（『中央日報』、2010 年 8 月 13 日）〈그때, 지금「제일 조선인 북송사업이 시작되었다」(『중앙일보』2010 년 8 월 13 일)〉
- (34) 栗田英二「植民地下朝鮮における神明神祠と〈ただの神祠〉」（崔吉城編『日本植民地と文化変容——韓国・巨文島——』御茶の水書房 1994 年）。栗田の神明神祠と「ただの神祠」は時系列的に言えば、本文で述べている通りであるが、この二つの神祠は、神祠制度を取り入れた当初から存在したものである。注 1 で紹介した 1917 年 3 月の「神祠に関する件」と同時に出された、各道長官宛政務総監通牒「神祠に関する規則を定むる件」（内秘 71 号）では「二、神祠の称号は成るべく祭神と祠名と契合する普通名詞を選択せしめ（例えば天照皇大神を祭神とするときは神明神祠とし譽田別命を祭神とするときは八幡神祠とするの類）其の神祠所在の郡名面名等は之を避けしむる様注意すること」とある。また、「神祠に関する件」が 3 月 22 日に施行されて以降、最初に「神祠設立許可」が官報に載るのは『朝鮮総督府官報』第 1502 号（1917 年 8 月 6 日）であるが、そこには 3 件の神祠の設立許可が掲載されており、内 2 件が神明神祠、残り 1 件が金刀比羅神祠（「ただの神祠」、慶尚南道河東郡東面、土肥隆太郎他 46 名の出願）であった。なお、上記の各道

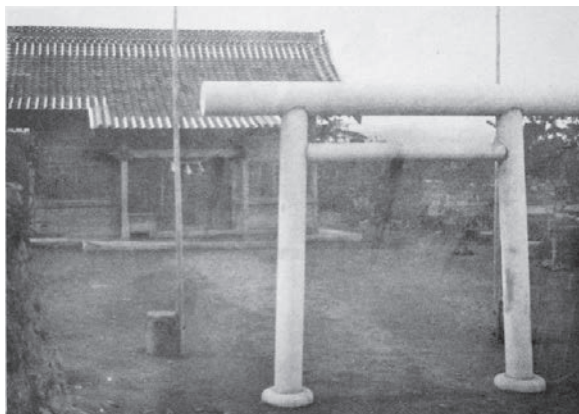
長官宛政務総監通牒の二にある「天照皇大神」は1936年12月22日の内務局長通牒「神明神祠祭神に関する件」で「天照大神」に統一された。この点については注3の青野論文2参照。

- (35) 設立願い出年月日と設立許可年月日、さらに実際に神祠が設立（鎮座）した年月日にはズレがある。例えば濟州邑神明神祠は、設立許可年は1931年12月1日となっているが、「日帝は大陸侵攻をするために1931年9月満州事変を起こした。この頃私達島民を日本人化しようと島司鈴木他93名から濟州邑に神明神祠設立を出願して同年12月1日許可された。翌年新島司田口禎熹は大急ぎで建築業者寺中鹿男に神社を建てることを命じた。」（濟州道『濟州抗日独立運動史』、1996年を下にした、濟州特別自治道ホームページ>濟州の歴史>抗日>日帝の侵略>民族魂の抹殺政策より引用。<http://www.jeju.go.kr/culture/history/antiJapanese/japanPlunder/japanPlunder03.htm>）、とあるように、実際に設立（鎮座）したのは1932年以降であったようである。『朝鮮総督府官報』によれば、鈴木兵作が島司であったのは1928年7月21日～1929年12月7日（『同』、1928年7月27日、第474号及び『同』、1929年12月12日、第884号）まで、その後田中半治が1931年12月11日（『同』、1931年12月15日、第1483号）まで、さらに田口禎熹が1935年9月6日（『同』、1935年9月10日）、第2600号）まで務める。

したがって、濟州邑神明神祠が設立許可された1931年12月1日段階での島司は田中半治で、願い出た鈴木兵作は元島司ということになる。おそらく、願い出は鈴木が島司であった1929年12月6日以前に出されたものと推測される。まとめると、願い出は1929年12月6日以前、設立許可は1931年12月1日、設立（鎮座）は1932年（以降）ということになる。最短でも足掛け4年が掛かったことになる（本文69頁に出てくるように、この神祠建設のために1928年に朝鮮時代の建物、拱辰楼を壊したということになると、もっと掛かっていることになる）。但し、この濟州邑神明神祠は、濟州島内で最大の神明神祠であったが、他の神明神祠と違って本格的に朝鮮において神社政策が強化される1930年代の半ば以前のものであり、濟州邑の日本人を中心とした人々によっていわば「下から」造られたものである。

他方、1939年に一斉に上からの指示に基づいて建てられた他の12の神明神祠の場合、これと同じような願い出、設立許可、実際の設立（鎮座）の年月日に大きなズレがあったとは考えにくい。青野はこの点について、本来「神社」は創立許可、神祠は設立許可があって初めて社殿の建設などが始まるのであるが、この時期、一面一神祠の政策によって建てられたものは、社殿の設置が先にあって願い出が出されていると述べている（注3青野論文2参照）。

尚、本稿の最終校正の段階で、『釜山日報』（1928年5月19日）に、以下に紹介する「濟州神社地鎮祭／公園景勝の地を相し／いよいよ造営にかかる」という記事を見つけた。「（前略）濟州では今迄神社が無いのを遺憾として昨年来之が建立のため前田島司が熱心に斡旋していたが氏の努力に市民も動かされ寄付金も五千円近く集まり愈々濟州公園上景勝絶佳の地を相して天照皇太神宮、明治神宮、琴比羅宮の三柱を奉安し濟州神社を建立する事になり去る十二日午後より雨模様の空ではあったが風も穏やかに雨も降らず青葉の茂る



濟州神社（濟州島森林組合『濟州写真帳』、1929年4月より転載）

中にテントを建て紅白の幕を廻らして祭壇を設けイト莊嚴なる地鎮の式を挙げた。この日参列者数百名森下氏の司祭にて前田島司の玉串奉奠及び（以下略）」。

これによると、1928年5月12日に「天照皇太神宮、明治神宮、琴比羅宮の三柱」を祭神とする濟州神社の地鎮祭が行われたという事である。また、濟州島森林組合『濟州写真帳』（1929年4月）には「濟州神社」の写真が掲載されている。本文69頁の「1928年に濟州邑神明神祠の建立のために拱辰亭が撤去された」ということとも関連して、この濟州神社と濟州邑神明神祠との関連は不明であり、今後の課題で

ある。

(36) 注 35 で述べたことと関連して、濟州邑神明神祠以外で、楸子面神祠を除く 1939 年に設立許可された神祠において、設立許可時の願い出代表者が現役の面長であるか、元面長であるかを確認するために『朝鮮総督府及所属官署職員録 昭和 13 年 8 月 1 日現在』及び『同 昭和 14 年 7 月 1 日現在』を使って、下表を作成してみた。この表で明らかのように、大静面の願い出代表者築山懋以外は、全員が面長又は元面長であることがわかる。尚、1941 年 5 月 16 日に設立許可された楸子面神祠の願い出代表者吉村昇は本文でもみた如く朴昇奎が創氏改名したものであるが、これも面長であった。

尚、大静面の築山懋は日本人で慕瑟浦郵便所長である。築山は 1875 年生まれ、長崎県北松浦郡出身。日清戦争後の 1896 年朝鮮にわたり、1904 年濟州島郵便受取所事務員、1912 年朝鮮総督府郵便所長補、濟州島慕瑟浦郵便所長になる（阿部薫編『朝鮮功労者銘鑑』258～259 頁、1935 年。表彰者名鑑刊行会『朝鮮總督府始政二十五周年記念表彰者名鑑』427 頁、1935 年）。濟州島における通信事業の創始時代からの功労者とされる人物である。しかし、それでも、なぜ大静面長が願い出代表者にならなかったのかは不明である。

	1938.8.1 現在の面長	神祠願い出代表者	神祠設立許可日	1939.7.1 現在の面長
旧左面	全仁洪	全仁洪	1939.2.25	全仁洪
大静面	金大有	築山懋	1939.2.25	金大有
城山面	金鶴寶	金鶴寶	1939.2.25	金鶴寶
朝天面	金汝熙	金汝熙	1939.2.25	高京贊
安德面	呉龍國	呉龍國	1939.2.25	金英鵬
南元面	金日華	金日華	1939.2.25	金日華
中文面	李斗白	李斗白	1939.2.25	李斗白
涯月面	金益俊	金益俊	1939.2.25	金益俊
翰林面	金昶宇	金昶宇	1939.3.4	金昶宇
西帰面	金贊益	金贊益	1939.3.22	呉龍國
表善面	宗仁錫	宗仁錫	1939.3.23	宗仁錫

(37) 「組合長朴昇奎は昭和 15 年 5 月 2 日氏設定、同年 5 月 15 日改名により氏名を吉村昇と……変更す」（『朝鮮総督府官報』第 4049 号、1940 年 7 月 20 日）。尚、他の朝鮮人面長も 1939 年段階では朝鮮人名を名乗っているが、1941 年段階では全員が創氏改名して日本人名を名乗っている。

(38) 注 35 参照

(39) 『朝鮮総督府統計年報 昭和 6 年』（朝鮮総督府、1933 年 3 月 31 日）

(40) インターネット新聞 jnuri（ジェイヌリ）から引用。「拱辰亭と三泉書堂からの歴史」

<http://www.jnuri.net/news/articleView.html?idxno=16088>

(41) 同上

(42) 「デジタル濟州市文化大典」の「濟州中央教会」の項。<http://jeju.grandculture.net/Contents?local=jeju&dataType=04&contents?id=GC007P0014>

(43) 濟州地方気象庁からの聞き取りによる。

(44) 総督府は神社の尊厳を維持するために、1 面 1 神社ないし 1 神祠に限定してきたが、慶尚南道では例外を認めるようになった。以下は「神社神祠／許可方針変る／一府邑面に例外も認める」という見出しの『釜山日報』の記事である（1932 年 10 月 14 日）。

「慶尚南道では、神社神祠の設立許可に付ては従来一府邑面一神社又は一神祠を限り許可する方針を以て詮議し来つたが、爾今左記に依り決定することになった。

一、原則として、一府邑面内一神社又は一神祠に限り設立を許可す。

二、經濟交通聚落の状況等に依り、一神社又は一神祠の崇敬区域と為し難き特別の事情あり、且多数の崇

敬者集団し維持経営の方法確実になりと認むるときに限り、左の例外を認む。

(イ) 一府邑面神社の外に神祠の設立は之を許可す

(ロ) 一府邑面一神祠の外に、神祠の設立を許可す」

尚、この記事では、慶尚南道ではとなっているが、注3の青野論文2(140頁)では府尹・郡守・島司宛の全羅南道内務部長通牒「神社及神祠の設立許可方針に関する件」(地第67号、1932年10月21日)を分析する中で、上記と同様の史料を紹介し、この通牒は朝鮮各道知事宛の総督府内務局長通牒がもとになっていると判断できるとしている。

(45) この、私たちの海外神社跡地の調査において、後述の朝天面での聞き取りでもそうであったが、日本の総理大臣の靖国神社参拝(今回は2013年12月26日の安倍晋三内閣総理大臣の靖国参拝)と絡んで、厳しい視線を浴びせられたのは、何も今回が初めてではない。2005年8月の韓国全羅南道和順郡の調査においても小泉純一郎内閣総理大臣の靖国神社参拝(2001年から2006年まで毎年参拝)を巡って、同じような状況があった(金花子「韓国全羅南道の旧神社跡地調査報告」、ニューズレター『非文字資料研究』第10号、神奈川大学21世紀COEプログラム推進会議、2005年12月や注3津田良樹他論文参照)。また、中国地域の調査においても、地域に建てられた神社のことを、現地の人々は口々に「ヤスクニ」、「ヤスクニ」と言っていた。日本のマスコミにおいては韓国、中国の靖国参拝批判はA級戦犯の合祀の問題だけに焦点があてられているが、実は両国の靖国神社参拝問題の批判の底流として、戦前期に建てられたこの海外神社の問題があることを見逃してはならないと思う。このことについて中島は『神奈川新聞』(2006年8月12日付)において「靖国参拝批判の底流」と題して述べたことがある。

(46) 築山懋については、注36参照

(47) 1945年、日本は米軍の本土上陸は、沖縄とこの済州島を経由して来ると予想した。そのため済州島は大規模な要塞化工事が行われた。出原恵三「済州島の戦争遺跡」(十菱駿武・菊池実編『続 しらべる戦争遺跡の事典』、柏書房、2003年6月)参照。

(48) このデジョン(大静)小学校の「神様」というのは、奉安殿か拝礼所のことであろう。

(49) 醮祭(ポゼ)は、韓国全地域に分布する儒教式の村の祭祀であり、牛や豚などの家畜を神様に供えて祭祀を行う儀礼の一つ。祭祀の目的は村の生産物の豊饒と家族の無病長寿などを祈願するものであり、男性が中心になって行う。元来は農村社会において穀物に害を与える醮神(ポシン)という神を祀る祭祠であったが、次第に村落を代表する祭祀になっていった。古くは村神を祀る村祭りは男女がともに参加したが、醮祭の導入により、男性を中心とする儒教式の醮祭と女性を中心とする巫俗式の堂祭(ダンゼ、ダンクッともいう)に二元化され、今日に至っている。

(50) 「朝天面は島内でも文化・教育の先進地域として知られ、日帝下では、多くの反日運動指導者が輩出した。解放後も南労党など左派勢力が強い基盤を持ち、四・三当時は、武装隊と討伐隊の攻防や殺戮もひときわ激しかった。朝天面で最初の大規模な殺戮が起こったのは1948年11月13日。その日の深夜2時、討伐隊が朝天面の橋来里を襲撃して火を放ち、100戸余りの村が一夜にして灰と化した。2日前に武装隊が朝天支署を襲ったことに対する報復であったが、30人の犠牲者(死者)は全員が3歳から70歳までの老人、女、子供であった」(注25、文京洙編『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか——済州島四・三事件の記憶と文学』284頁。また翌年1949年1月17日、18日の両日にわたって朝天面北村里では「共匪と内通した」との疑いをかけられ、「討伐隊」により村の300余りの家屋が焼き尽くされた上に、約400名が虐殺された(同、266頁)。

(51) シャーマニズム系統の巫俗信仰に基づく祈りの聖地を堂(ダン)というが、その中でも中心的なものは、村・共同体の神を祀る本郷堂と呼ばれるものである。注49及び本文「おわりに」参照。

(52) 注49参照

(53) 千葉正士「東亜支配イデオロギーとしての神社政策」(『仁井田陸博士追悼論文集』第3巻、『日本法とアジア』、勁草書房、1970年)尚、青井哲人は、居留民奉斎神社と政府奉斎神社という概念を提出している(『植民地神社と帝国日本』、吉川弘文館、2005年)

- (54) この櫓（ケヤキ）の存在は、私たちの調査で見落としていたが、2015年8月23日に研究協力者の辻子実氏より、その写真と共に情報をいただいたものである。
- (55) この青年団によって壊されたという話は、韓国全羅南道和順郡の調査においても、和順面神明神祠や清豊面神明神祠での聞き取りでも出てきたものである（注3津田良樹他論文参照）。この青年団の性格については、今後詰める必要のある課題である。
- (56) 朝鮮時代を含めて、韓国にキリスト教信者が多いことは周知の事実であるが（2005年段階でプロテスタントとカトリックを合わせたキリスト教の信者は全体の29.2%で、仏教22.8%を上回る）、この濟州島ではカトリックの信者が多く（6万5千余名、濟州道民の11.5%）、カトリックだけでみると、濟州教区は韓国内の他の教区に比べて最大の信者数を持っているとのことである。（「濟州教区 司牧局長 ヨハネ 高神父からのメッセージ」（『京都教区時報』2010年9月号）
- (57) 米軍政下における、キリスト教に対する優遇措置については注10の諸葛論文参照。

また、この点に関連して史料を一つ紹介しておく。

① 「槐清第 号

西紀一九四六年八月七日

清安面長

前日本人神祠敷地使用에 관한件
標記의件에關하여 東面所在前日人神祠敷地를清
安長老教会堂建築基地로米軍軍政에使用許可
를受하였다는 旨清安長老教会에서申告가有하기에許可証副本添
附報告함」

② 「 HEADQUARTERS
UNITED STATES ARMY MILITARY GOVERNMENT IN KOREA
Office of the Provincial Military Governor
Chung Chong Pukto
Chong Ju, Korea

3 June 1946

SUBJECT : Permit to Build on Japanese Shrine Site
TO : Chung An Presbyterian Church
Chung An Myun, Koesan District

Permit is granted to build church on Japanese Shinto
Shrine Site with the understanding that by so building you
will receive no priority to purchase the land if and when sold
nor any encumbrances to the land whatsoever

BY DIRECTION OF THE PROVINCIAL MILITARY GOVERNOR :

JOHN H FOLKS
1st Lt., FA
Property Custodian」

①は1946年8月7日に忠清北道槐山郡清安面長から槐山郡内務課に宛てた報告書であるが、清安長老教会が米軍軍政（庁）から東面にあった旧日本人神祠跡地に教会堂を建築することの許可を得たというものである。

②は1946年6月3日に忠清北道の清州に司令部を置く、米国陸軍朝鮮軍政司令部の地方軍政庁が、清安長老教会（プレスビテリアン）と槐山郡清安面に宛てて出した、土地の所有権などを有しないという条件付きで、旧神祠跡地に清安長老教会の教会（堂）を建てることを認めた許可証（副本）で、①の史料に添付されたものである。

出典は「전일본인신사부지사용에 관한건（前日本人神祠敷地の使用に関する件）」（忠清北道槐山郡内務課）、국가기록원（大韓民国国家記録院）<http://www.archives.go.kr>、

史料アドレス（閲覧には専用ソフトが必要）

<http://theme.archives.go.kr/next/pages/viewer/archiveViewer.jsp?archiveEventId=0032755778&singleData=Y>

なお、史料の解釈について、①については研究協力者金山浩氏の知人李香眞氏、②については客員研究員の菅浩二氏（國學院大學教授）にお世話になった。記して謝意を表すしだいである。

(58) 青野正明は注3で紹介した、青野論文1及び3で、この問題に肉薄しようとしている。